第 33 期国立市公民館運営審議会・国立市公民館　共催

2021 年 12 月 18 日開催　社会教育学習会　記録とまとめ

パネルディスカッション
「コロナ禍における学びとつながり
～公民館の役割と期待すること～」

本記録は、第 33 期国立市公民館運営審議会答申「新型コロナウイルス感染拡大時における教育機関としての公民館事業について」の一部であり、2021 年 12 月 18 日に開催した社会教育学習会（参加者 51 名）を音声録音データの文字起こしから作成した。当日の様子やその場にいる一人ひとりの思いを出来る限りそのまま表現することを重視しつつ、文意を正しく伝えるために一部修正を加えて編集を行い、登壇者や関係者に可能な限り確認していただいた。

学習会のチラシ、当日配布資料（レジュメ）、参加者のアンケート、企画・実施・ふり返りのプロセスを通じて、担当の公民館運営審議会委員や登壇者が考えたこと、感じたことも掲載した。

不充分な点も多いと思うが、コロナ禍における公民館の役割とともに、市民が学びやつながりをどう考え、どう行動したのかなど、社会教育学習会の記録を通して考える素材の一つになればと願い、答申本文と併せて、ご覧いただきたい。

目　次

1．社会教育学習会記録

基調報告（第 33 期国立市公民館運営審議会）　末光　翔 …… 104

第 1 部　各団体からの活動報告 …… 106

コロナ禍での私たちの学び／公民館にしてほしかったこと、今後してほしいこと

①公民館利用者連絡会　長田利信さん

②喫茶わいがや　片岡　優さん

③KUNIFA 日本語サポート　池田祐子さん

④心遊会　原　秀雄さん

⑤ライフデザイン 2018　久野千鶴さん

⑥中高生のための学習支援 LABO☆くにスタ　山本貫人さん

⑦国立市公民館職員　針山和佳菜さん

第 2 部　パネルディスカッション …… 116

2．社会教育学習会を終えて …… 130

(1)登壇者

(2)参加者アンケート

(3)企画者

3．資料（チラシ、当日配布資料（レジュメ）、参加者アンケート）…… 134

4．社会教育学習会のねらいと成果 …… 139

1．社会教育学習会記録

【司会（髙野）】本日は 13 時 30 分から 16 時までという長い時間となりますが、どうぞよろしくお願いします。全体司会を務めます。高野と申します。

それでは、早速ですが、簡単に本日の流れを説明させていただきます。お手元、レジュメをご準備いただけますでしょうか。

まず、「はじめに」、公民館運営審議会（以下、公運審）の末光委員長より、今期審議されてきた答申策定の途中経過と本会で期待することなどを、簡単に報告させていただきます。

その後、第 1 部としてパネリストのみなさまの活動報告、休憩を挟み、第 2 部にてパネルディスカッションを行います。

ここで、登壇者を紹介させていただきます。本日は、公民館で日頃活動されています方々、そして公民館の職員をお呼びしました。

「公民館利用者連絡会」の長田利信さん。

「喫茶わいがや」から、片岡優さん。

「KUNIFA 日本語サポート」の池田祐子さん。

「心遊会」の原秀雄さん。

「ライフデザイン 2018」から、久野千鶴さん。

中高生のための学習支援、「LABO☆くにスタ」から、山本貫人さん。

公民館職員の針山和佳菜さん。

そして、第 2 部でコーディネートをお願いしている、公運審の学識委員で、放送大学千葉学習センター所長の長澤成次さんです。

登壇者のみなさま、本日はどうぞよろしくお願いします。

それでは公運審の末光委員長より、報告を始めさせていただきます。よろしくお願いします。

基調報告（第 33 期国立市公民館運営審議会）

【末光】みなさん、お集まりいただきありがとうございます。第 33 期公運審の末光です。よろしくお願いします。

今日の社会教育学習会を始めるに当たって、まず、公運審が今期どういう状況で動いているかという簡単な説明と、今回の学習会の趣旨説明をできればと思います。

レジュメの 1 ページ目（134 頁参照）に簡単に概要をまとめています。公民館運営審議会は、ご存じの方も多いかと思いますが、簡単にどのような組織かというのを説明していきます。

「公民館長の諮問機関として、『公民館における各種事業の企画実施につき、調査審議する』役割を担う。国立市公民館条例第 5 条では公民館の民主的運営を図るため、公民館運営審議会を置くことが定められており、委員の定数は 15 名とされている」とあり、戦後からもともと、以前の法律では、公民館に必ず置くことになっていた附属機関で、国立市では公民館が開館した 1955 年からずっと続いています。

国立市の場合は、「民主的運営を図る」と記載されていることがすごく大事で、基本的な役割は館長の諮問、このようなテーマについて考えてほしいということを考えるのが、主な役割としてあります。国立市の場合は戦後すぐに、公民館予算に関して市に要望書を出したり、職員人事に関して、このような職員人事を考えてほしいといった意見を、市や教育委員会に出したり、いろんな市民の立場に立って意見を出したりといった活動をしている組織になっています。

今期で第 33 期、私は「青年室」出身です。歴代の最年少かどうか分からないですが、委員長を務めさせていただいております。

今期、第 33 期公運審では館長から「新型コロナウイルス感染拡大時において、教育機関としての公民館事業はどうあるべきか、公民館事業の在り方」という諮問が出され、目下議論を進めたり、いろいろな記録を集めたりということを進めているところです。アンケートをこれから取っていきますが、どのようなアンケートを作っていくか、行政の記録を調べて、公民館休館はどういった流れで決まっていったのかなど、多様な観点から調査を進めているところです。これまでの話し合いでは、それぞれの市民団体の立場、委員の立場から、公民館休館時の状況について振り返っていて 1 年半前ですが、いろいろ大変なことがあったと。様々な形で苦労があり、市民同士の支え合いが行われてきた。といっても、今回はちょっとまとめきれてないので報告できないですが、議論であったり、確認を進めたりしています。

今回の学習会を企画して、みなさんといろいろなことを考えていきたい、社会教育について考えていきたいというところですが、今回の学習会に関して、考えたい論点として、いくつか挙げております。

1つ目は高齢の方、しょうがいのある方、日本語を母語としない方々など、学びに参加しづらい、ハードルのある方々の学びや活動を、それぞれの立場からどのように支えていくことができるのかということです。これは公民館側の課題でもあり、私たち市民一人ひとりの課題でもあると思います。今回のパネリストの方にも、日本語の学習をサポートする「KUNIFA 日本語サポート」であったり、しょうがいのある方と喫茶を運営する「喫茶　わいがや」であったり、いろいろな立場の方と学習を進めている団体の方々に来ていただいております。その中で、コロナ禍でリスクも高く、なかなか活動しづらい中で、どうやって活動を続けていくか、一人ひとりの不安であったり、生きづらさにどう寄り添ったりしていくかなど、いろいろな苦労や工夫があったかと思います。それらについて、お話をお聞きできればと思います。

もう一つは、これは古くて新しい観点かもしれませんが、「公民館は、国立市で暮らす市民の誰もが何げなく訪れ、安心して話ができる場でもあるのでは。地域の安心の場としての公民館があることを広く知ってもらうには？」ということも書いています。これは、コロナで休館から再開して、他の自治体では、開館は夜 8 時までとしているところがほとんどだと思いますが、国立公民館では夜 10 時まで開けて、自粛は求めつつも使っていいよとしていて。その夜 10 時まで開けている中で、もしかしたら居場所に困っている方々が、夜遅くにふらっと訪れて、安心できる場でもあったりしたかもしれないのでは、あるいは講座であったり、グループ活動にはまだつながってなくても、一人ひとりが安心して利用できる場でもあるのではないかと。そういったところも公民館は、特にコロナ禍で人びとが孤立し、混乱している中では、大事なのではないか、そういった観点もあります。

今回はそれぞれの団体の方からお話しいただくということで、基本的には 1 番目の視点の関心のほうが多く出てくるかと思いますが、こういった 2 点目のことも、今後考えていきたいと思っているところです。

それを踏まえて 3 点目、「一人ひとりが主体的に学び、生きることを、公民館がどのように支えることができるのか？　例えば休館時、公民館の立場から何ができたか？」ということで、やはり諮問の答申としても、これからの公民館の事業運営の在り方、事業の在り方について考えていきたいのですが、それを考える上で、1年半前の公民館休館時の状況をしっかり振り返っていきたい、記録して、どうだったか、何ができたか、何ができなかったかということをしっかり確かめて、まとめていきたいと考えているところです。

これらについて、いろんな関心はありますが、今回の学習会という場で、できるだけ多くの市民の方々の声を聞いて、それらをしっかりと話合いの中でも反映させて、答申として、教育委員会であったり、公民館の職員の方々であったり、来年度中に意見をまとめて届けたいと考えているところです。こういったコロナ禍を振り返るという機会はなかなか少ないと思います。一度立ち止まって、1年半前はすごく昔のようにも感じますが、振り返って、あの時どうだったかというのを考える機会にしていきたいと思っております。

それらを踏まえて、今回は、それぞれパネリストの方々の、具体的な課題に感じたこと、困ったこと、苦労したこと、工夫したこと等、当時のことを具体的に振り返っていただくということを中心にしていき

たいと思っています。その上で、目指したいこととして、それぞれのパネリストの方々が大事にしている、学びであったり、つながりであったりということをお聞きして、一人ひとりが「主権者として生きる」であったり、「大人の学び」とは何か、そのような社会教育の根本について、それぞれ考えを深めていく機会にしたいと思っております。

この「主権者として生きる」というのはなかなか難しいテーマではありますが、例えば、「ユネスコの学習権宣言」では「なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつくる主体に」という言葉もあります。そのようなことと関連して、コロナ禍の様々な公衆衛生で大きく活動が制限される中で、私たち一人ひとりがどう行動していくか。また、それらを公民館がどのように支えていけるのか、社会教育がどのように伝えていけるのか、感染拡大が今後また起きるかどうか分からないですが、教訓としてしっかりまとめていきたいと思いますし、公運審だけでなく、広く市民同士で考えていく機会にしたいと思っております。

このような趣旨で、今回の学習会を行いたいと思います。

この後はパネリストのみなさんにバトンタッチして、議論をしていければと思います。よろしくお願いします。

【司会（髙野）】公民館運営審議会では、引き続きこのような問題意識を持って検討を進めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

それでは早速ですが、第 1 部のパネリストからの事例報告「コロナ禍での私たちの学びは」という企画に移らせていただきたいと思います。

事前に各登壇者のみなさんに、コロナ禍における活動と悩み、そして、この間公民館にしてほしかったことというアンケートを取らせていただきました。その内容の一部を、今日お配りしているレジュメに掲載させていただいております。今日お話しいただく内容と併せて、参考資料としてぜひお使いください。

また、公民館職員の針山さんに関しては、ほかの登壇者とは立場が異なることから、今日は公民館の一職員として感じたことを話していただく予定です。

団体紹介のほうはレジュメに記載していますので、簡単に自己紹介と、それからコロナ禍での活動、悩みについて、順番に 3 分以内でお話しいただきたいと思います。

では、公民館利用者連絡会の長田さん、お願いいたします。

第 1 部：各団体からの活動報告

○コロナ禍での私たちの学び

① 公民館利用者連絡会[1]　長田 利信さん

【長田】こんにちは。長田です。「公民館利用者連絡会」は、公民館を利用している団体が集まって、どのようにしたらみなさんが気持ちよく、無料で公平に差別なく利用できるかという調整のお手伝いをしています。私自身は、「火曜会」という交流サークルをやっていますが、公民館利用者連絡会に入って、代表をやれと言われ、活動しています。

みなさんいろいろ参加をしていて、コロナのことで活動ができないということが、実際に出てきたわけですよね。想像すればできたかもしれませんが、本当に予期しないようなことでした。私たちの公民館利

[1] 公民館を利用する団体が安定的に活動できるよう、各サークルが集まり、部屋の利用を調整する調整の場づくりをはじめた自主的グループ。現在の活動内容は、公民館が主催となった会場調整会の協力、公民館交流会への参加協力、公民館利用に際しての要望等を届けている。

用者連絡会も、対面で総会ができませんでした。そのため、書面でやりましたが、活動がうまくできなくて。やっと収まったというか、ワクチンができるというようなことで、今年、1年ぶりに総会を対面で開催しました。

そのときに、やっぱり実際に人が集まれるということが、とても大事なことなのだなと。その時、サークルの代表の方々に聞いたら、不安で仕方がなかったと。活動をやっても人数が集まらない、寂しいと。やっぱりちょっとでも集まって、雑談でもいいから話ができてよかったと。Zoom とか、LINE とかでいろいろ連絡をとって、参加が拡大したということもありましたが、やっぱり生の声を聞けてよかったという声を聞きました。そのような中では、人数が制限されて行事も縮小されて、人の交流というのがあまりできなかったかもしれませんが、7月に開館されて、みなさんがちょっとでも集まったということは、よかったと思います。

月 1 回の「調整会」というのは、全員が集まることができず、情報を生で伝えることはできなかったのですが、少なくとも『公利連だより』を発行して、みなさんに情報を発信したことが、少しはよかったかなと思っているんです。やっぱり公民館は交流の場なので、人が集まって、自分だけではなくて人の感じ方を聞いたり、考えを聞いたり、一方通行じゃなくて行ったり来たりということができることが、一番大事じゃないかということをコロナの中で思いました。

そのような面では、もう早く収まってほしいということを念じるばかりですが、人が集まっていろいろ交流できるということが、何をおいても大事じゃないかと思いました。

② 喫茶わいがや[2]　片岡 優さん

【片岡】こんにちは。公民館の 1 階にある喫茶店、「喫茶わいがや」の片岡です。喫茶「わいがや」に来たことある人？」（会場に呼びかける）ありがとうございます。来たことない人も、ぜひ来てください。

「喫茶わいがや」は、基本的にボランティアで運営されていて、10 代から 30 代を中心としたスタッフと、公民館が共同で運営しています。それに加えて、ちょっとここが分かりにくいのですが、「しょうがいしゃ青年教室」というのが公民館の事業にあり、しょうがい当事者の方と、青年、若者が、工作だったり、料理だったり、スポーツだったり、いろんなコースに分かれて、生活に関係することを学んでいく教室があります。その一つに、喫茶店のメニューを出したり、作ったりする事を学ぶという、喫茶実習講座があります。そこに登録しているしょうがい当事者の方が、「わいがや」に派遣される感じで、一緒に店員さんとして参加しているのが、喫茶「わいがや」の説明になります。

それで、コロナ禍での悩みですが、喫茶「わいがや」は、コロナ後に長期間の休業を 2 回しました。1 回目が、緊急事態宣言が出た去年の 4 月から 6 月、約 2 か月。もう 1 回は今年の年明けから 10 月ぐらいまで、緊急事態宣言もしくは、まん延防止措置のその期間、昨年2か月、今年も9か月、休業していました。

休業するに当たって、2 つの議論がありました。1 つ目が、資料の最後に「2 つのジレンマ」って書いてあるのんですけれど。

ジレンマの 1 つ目が、公民館の一部のスペースを独占的に使っているので、喫茶「わいがや」は地域に対して社会的責任があると。その社会的責任を果たすためには、営業すべきなのか、それとも営業すべきでないのかという議論がありました。普通の時なら、営業して地域の方に、喫茶の飲物とか食べ物を提供することが、公益になります。感染が非常に拡大している中だと、例えば、そこで飲食を提供することによって、クラスターが起きて、地域の方々が病気になったり、地域の医療資源を圧迫したりしてしまうというのが考えられるので、地域に感染を広げないことを優先して休業を判断しました。個人的には妥当だったと思いますが、存在意義が問われる、苦しい時間でもありました。

次のジレンマ、2つ目は、特にしょうがい当事者の方の、心の健康、心の居場所づくりのために営業すべきなのか、それとも体の健康を守るために休業すべきなのかというジレンマがありました。しょうがい当

[2] 市民団体「障害をこえてともに自立する会」が公民館 1 階で営業する喫茶店。10～30 代を中心としたスタッフが運営を担い、公民館と連携して各種事業を実施している。しょうがいしゃ青年教室に登録しているしょうがい当事者も実習生として活動する。

事者の方はなかなか居場所が少なく、制限されることがあるので、お店を閉めてしまうことで、精神的に結構きつい思いをする方がいるのではないかという心配があります。

それで、昨年はお店を営業し、営業していれば喫茶実習として、しょうがい当事者の方を受け入れるし、店がやってなかったら受け入れを停止するというようにやっていましたが、今年の 6 月からは、しょうがい当事者の方のワクチン接種が進んできたので、お店は営業しない、お客さんは入れない、しかし、お店の奥でしょうがい当事者の方の喫茶実習だけ行うという、折衷策を取りました。これはわりと、二者択一に留まらない間に落とせたと思います。

なかなか、心と体の健康は両方大事なので、また深刻な事態になったらどうしようという、明確な答えは未だに出ていないです。

③ KUNIFA 日本語サポート[3]　池田 祐子さん

【池田】「KUNIFA 日本語サポート」の池田と申します。地域で日本語を学ぶ人たちの日本語学習のサポートをしております。私自身は 8 年前に退職したとき、その前の年に公民館の日本語教育入門の講座を受けていたこともあり、何かすごく、とても軽い気持ちで、「外国の人に日本語を教えるのって楽しそう」っていうような気持ちで、退職と同時にこのサークルに参加させていただきました。実際に入っていろいろ分かっていくと、もともと私みたいな軽い気持ちで始めたようなものではなく、すごく歴史があって。もう 30 年前から、一橋大学の留学生の家族の方たちは、日本語が全然分からなくて、子どもさんとかの学校のこととかで苦労しているような、家族の方たちなどを支えたいとか、何とかしたいみたいな、そのような気持ちで始められた。それでずっと、いろいろな留学生のための生活用品のガレージセールや、ホームステイ等、いろんな活動をしていました。20 年ほど前に日本語部門が「KUNIFA 日本語サポート」として独立し、2 年前に 20 周年を迎えたというところです。

実際、私も始めてみて分かったのは、小学校から来たお便り等も、大体私たちは気にしないで読み飛ばしてしまいますが、運動会のお知らせ一つにしても、「みなさま方にはますますご健勝のことと慶び申し上げます」みたいに書いてあって。外国の方にしてみると、持ち物や集合時間とか、どこがどう大事なのかとか、そのようなことも分からない。学校に持っていく水着にしても、どのような水着を用意してよいか分からなくて。ちょっとフリフリな派手な水着とか買ってしまって、子どもがつらい思いをする等、いろいろなことがあったようです。生活の中で圧倒的な情報弱者だと思います。そのような情報弱者の方たちに、日本語を単に教えてあげるみたいな、上から目線ではなくて、地域でつながる友人として、支え合えるような、そのような関係を築いていきたい、それを会の一番の目的にしております。

コロナ禍ですが、実際、かなりぎりぎりまで、公民館の「生活のための日本語講座」の後に、プロフェッショナルな先生の授業の復習をしたりとか、学習者の求めに応じていろんな会話を楽しんだりとか、または検定試験の勉強をしたりだとか、私たちはいろいろな勉強をマンツーマン中心でやってきました。しかし、そういった活動が、休館時にはやはりできなくなりました。あと土曜日にも、私たち公民館の講座とは別に学習をやっており、そちらは休館の連絡で、「活動がストップするよ」、「お休みしますよ」という連絡を、一人ひとり、何とか電話で伝えていったことも大変でした。実際パタッとできなくなったとき、どのようにサポートしていったらよいのかとかなり悩みました。

そのような中で、マンツーマンでいつも決まった人と日本語のサポートをしているところでは、オンラインを使うことがいくつかできました。あと、「にほんごサロン」では、「KUNIBO」という、「くにたち地域外国人のための防災連絡会」と公民館との共催で、実際に保健所の方のお話を伺い、コロナ禍に関する情報を伝えることも行ってきました。

やはり、災害の時とか、今回みたいなコロナ感染時には、情報が普通に入ってこない、私たちはテレビのニュースや新聞等で、いろんな情報が入って分かるのですが、外国の方たちと話していると、「日本のニ

---

[3]　地域で日本語を学ぶ外国にルーツのある人たちのパートナーとなり、学習者が生きた日本語を学ぶためのサポートをするボランティアのグループ。公民館講座「生活のための日本語」の後の時間と、土曜日午前に日本語の実践会話の練習などを行っている。

ュース、テレビで見たりする？」って聞いても、ほとんど、相当、日本語が上手な方でも、やはり日本のマスコミには触れてないですよね。ですから、今、緊急事態宣言が出ている、どうなっているとか等の、情報も入って来ないので、そのようなサポートを本当はどうすればいいのかなと、私は個人的にはすごく考えているところです。

公民館が、誰もが参加して、つながれる場所でありたいというところで、情報弱者である外国人の方たちも、もし公民館に来るといろいろな情報、コロナだったらコロナの情報等が分かるような手だてがあるといいなと思います。公民館の「公」の部分と、私たちボランティアの「私」の部分とがつながって、何かサポートできたらいいと漠然と考えています。

といっても、公民館に来てくれている今の外国人学習者の方は、そんなに沢山ではなく、まだまだほんの氷山の一角しかカバーできていないため、これから、どうしたらよいかみんなで考えていきたいなと思っております。

④ 心遊会[4]　原 秀雄さん

【原】こんにちは。「心遊会」の原と申します。

唯一公民館の講座の中で、条件が厳しい講座を受講いたしました。なぜかというと、「シルバー学習室」というのは年齢制限がありまして、若者は入っちゃいけないのですね、これは。ジジババしか入れないのです。制限があり、それ以上にならないと入れない。ですから、みなさん若い方入れませんよ。
この中にいらっしゃるみなさん、若いから入れない。年取らないと入れませんので、ぜひ年取ったら、シルバー学習室の講座を受講してください。非常に楽しい、本当にためになる講座です。

実は私、4年前にこの講座を受講させていただきました。私、出来が非常に悪かった。卒業というか修了式に、「ぜひ留年させてください」と、公民館館長にお願いしたのです、石田さんに。そうしたら、「駄目だ」って言われました。「全員卒業」だって言う。だって、「単位が悪かったら留年あるでしょ？」と言ったら、「留年はない」「全員卒業」だって。「いや、私ね、もう一回やりたいのですよ」って。そうしたら、「原さん、卒業したら同じようなことできますよ」って。「心遊会という組織がありますよ」って。「心遊会って卒業生がつくった組織があるから、そこでやりなさい」と。そう言われましたので、無理に卒業させられまして、「心遊会」という組織に入りました。

「シルバー学習室」で勉強したことを、卒業生が集まって同じようにやってくださるのです。その代わり、「シルバー学習室」は市民の税金でやっていただきましたので、ただで楽しくやってもらったのですが、今度、私は自分のお金でやらなきゃいけない、会費を払わなきゃいけない。これは当たり前ですよね。私たちは会費を払って、10のサークルがありますので、その10のサークルの好きなものを選んで入って、中には、絵を描きたい人は絵を描くサークルに入る、歌を歌いたい人は歌のサークルに入る、踊りを踊りたい人には踊りのサークル、散策した人は散策のサークル、いろんなサークルがありますので、そこに入って、いろんな授業を受けたことをずっと続けていくというのが、「心遊会」という団体です。

ただし、そこに入っているメンバーは、「シルバー学習室」で勉強した人の集まりですから、当然、それ以上の年代です。卒業生ですから。シルバー学習室っていうのは60歳以上の人です。当然、それを卒業した人だから、1年間やりますから、61歳以上の人が集まっている。ただ、「心遊会」っていうのは大体、80歳を過ぎますと、もうそろそろいいかなってみなさんお辞めになります。

でも、最高は94歳だそうです。今。そこまで頑張ってらっしゃる方もいます。頑張ってね、運動されたり、会に参加されたりしていますよ。元気でいらっしゃる。人と会えることは、元気になる。

コロナでだんだん、だんだん会えなくなりました。10 のサークルがありますが、実は、今、2 年間ずっと活動してないサークルがあります。それは合唱です。合唱だけはできない。このぐらいの広さの、隣のビルを借りてやっていたのです。ところが、集まれない。数が多いのです、合唱団のメンバーが。20 名位いるのですね。それも、ご高齢の方が多い。みなさん、月 1 回集まって大きな声を出す。楽しく歌いま

[4] 公民館の講座「シルバー学習室」I期が1980年にスタートし、2022年度は43期生が学習している。心遊会は「シルバー学習室」のOB・OGが結成した親睦団体で1986年に発足。現在の会員は175名在籍。

す。ところが、集まって歌えない。これが一番のやっぱり打撃ですね。2年間、ずっと休んでいます。まだ開けない。来年の 4 月にやろうかなと思っているのですけど、これもちょっと今、クエスチョン・マークになっております。

それから、散策の会にしましても、今まで都心のほうにずっと行っていまして、いろんなところ、ずっと回っていました。浅草とか、月島とか、もんじゃを食べに行く等、いろいろしていました。ところが、都心は怖いですね、行くのが。電車乗って都市に行くのは嫌な方が多く、だいたい多摩地域。多摩地域も結構いっぱい行くところがありますので、近場で済ませています。この間も国分寺だとか、村山だとか、近場にしまして、そういうところで散策を終えているとか、そんなような工夫をしながら、サークルは一生懸命頑張っています。

でも、やっぱり月に一遍でもそうやってやると、普段うちに籠もっている方が出てきます。「あ、今日はサークルだ、第 3 金曜日だから」、「第 3 水曜日だから、行こうかな」って、国立駅に集まってくる。そうすると仲間がいる。仲間と一緒に行く。その行った方は、途中で動けなくなっても、仲間が何とか一生懸命動かしてくれる。それで、ご自宅に帰るまで面倒を見てくれる。そのように、お互いにお互いをこうやって面倒見ながら活動していく。そうすると、元気になります。月に一遍でも動ければ、本当に元気になります。これはやっぱり、人と人と会っている。これ、大事ですね、人と会うことは。ですから、「心遊会」の各サークルのみなさんは、ボランティアで本当の見守りですよ、人の。大事だと思います。こういう活動を実際されていると思います。

それと、俳句も作っています。結構狭い部屋ですが、ひしめいて入って、句を作ります。句を作って、名前は書きません。で、見て、「誰がいいかい？」とみなさん、評価されている。頭使いますよね。頭の活性化ですよ。素晴らしいです、これ。脳トレ。いろんなことやっています、みなさん。だから、元気です。

「心遊会」っていうのは、年配者、ジジババの集まりですけども、みなさん元気です。だから、「長生きしたきゃ心遊会に来い」というかたちで、ぜひみなさんも、これからお歳になったら、この公民館の「シルバー学習室」に入っていただいて、卒業して、「心遊会」で私たちと一緒に活動をして、ますます長生きして、実際、人間の寿命というのは 150 歳まで生きられるそうですよ。そんなに生きたくないっていう方もいらっしゃると思いますが、とにかく私たちも 150 歳目指して、頑張って生きていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

以上でございます。ありがとうございます。

⑤ ライフデザイン 2018[5]　久野 千鶴さん

【久野】こんにちは。「ライフデザイン2018」という、主婦がメインで活動しているグループの久野千鶴と申します。「ライフデザイン 2018」は、もともと公民館で毎年開催されています「女性のライフデザイン学」という講座を受けたメンバーたちが中心になって、グループが発足しました。

その「女性のライフデザイン学」という講座自体も、実はすごく歴史が長いのですが、意外と知っていらっしゃる方が少ないです。私も本当に自分が受ける歳になって、初めて知ったぐらいです。

この「女性のライフデザイン学」を受けたことで、さらに初めて知ったことのですが、公民館の中には保育室があります、公民館保育室、ご存じですか？　保育室がすごく手厚くて、温かくて、本当に丁寧に子どもを見てくださっていて。それがこの講座を受けている間、毎週午前中の 2 時間、無料で子どもを見てくださるっていうのが、すごく支えになり、頼もしかったです。

この講座自体も、ぜひみなさん、もっと知っていただきたいと思っています。その講座をきっかけに、私たちはそこからまた自主グループとして、週 1 回集まって、そこからは、もう自分たちで学びのテーマを見つけて、毎週話し合ったりしていきますが、その間もずっと引き続き、保育室に子どもを預けること

[5] 公民館の講座「女性のライフデザイン学」の 2018 年受講メンバーを中心に集まったグループ。関心があるテーマについて語り合う、得意分野を活かした講座などを開催。仲間とともに、女性としての自分の人生について考える機会となっている。

ができ、本当に公民館と公民館の保育室に支えられて、私たちは活動しています。

コロナ禍での活動を振り返ったとき、メンバーみんなで振り返ってみたのですが、実は私たち自身の活動としては、コロナ禍であっても、そこまで支障はなかったように思います。というのも、そもそも、小さな子どもを育児中の母親たちが中心なので、子どもが熱を出しましたとか、幼稚園の役員の用事でとか、当日急に集まれないメンバーもたくさんいて、全員が集まるっていうことは、ほぼほぼない。なので、日頃から、公民館で直接集まって活動する以外に、グループ LINE とかを用いて、なるべく、その日みんなが「こんなことを話したよ」とか、「こんなことを紹介しました」っていうことを、当日来られなかった人も情報共有できるようなことを、コロナ禍以前からずっとやってきていました。

と言いつつも、昨日、コロナ禍のときのグループ LINE を振り返って見てみたのですが、やっぱり「支障はなかったね」と言いつつも、グループ LINE の内容、みんなのコメントを見ると、結構みんな行き詰まっていて。去年、公民館が休館したぐらいから同時に、小学校も休校、幼稚園も休園となって、母たちはみんな急に 24 時間、毎日子どもと一緒みたいな生活が始まってしまいました。やっぱりそれが一番つらかったですね。何か、公民館に来て学ぶ以前に、学ぶための気持ちの余裕も、時間の余裕もなくなってしまっていたなと思います。何とか毎日、子どもと一緒の生活を乗り切るために、グループ LINE 上で、「うちはこんな工夫をしているよ」とか、「子どもをここに連れていったりすることができるよ」って、情報共有しながら、励まし合ってやっていました。

なので、公民館に集まって活動ができない間も、このグループの活動が、グループがあったということがすごく支えであって、それによってコロナ禍をみんなで乗り切ることができていたと思いました。

生活が本当にいろいろ激変していて、例えば、子どもが 24 時間、毎日一緒もそうですし、旦那さんたちのリモートワークも始まり出して、旦那さんが毎日家にいる。毎日お昼ごはんを作らなくちゃいけなくなったり、旦那さんが家でオンライン会議をしている間、子どもを外に連れ出さなければいけない。でも、公園の遊具でも感染するかもしれないっていう噂があるとか、本当に子連れでいける居場所がなくて、それがつらかったです。だから、本当に、公民館のように保育室があって、毎週定期的に集まれる、自由に集まれる場所があるということが、本当にありがたいなということを、改めて感じました。

私個人としては、実はこの「ライフデザイン 2018」のグループ活動より以前から、もう 10 年以上、「喫茶わいがや」のスタッフとしても、公民館で活動させていただいていて。ほぼほぼ、国立に住んでいる期間と同じぐらい、公民館には本当にお世話になっていて、長い間お世話になっている利用者の 1 人として、今回はこの公民館のお役に立てればという気持ちで参加させていただいています。みなさんと一緒に、振り返りのお話を聞きつつ、一緒に考えて、学んでいけたらと思っています。よろしくお願いします。

⑥ LABO☆くにスタ[6]　山本 貫人さん

【山本】こんにちは。「LABO☆くにスタ」の山本貫人と申します。よろしくお願いします。

まず、「LABO☆くにスタ」とは何ぞやという話ですが、毎週水曜日に、ここの地下ホールを使って、中高生と大学生の交流というか、学習支援を行っており、その中で、中高生が学校で分からなかった問題や

6　水曜日の夜、中高生が学校の宿題等を持参し自学するサポートを、大学生が行う学習支援事業。子どもたちの居場所としての機能も大事にしている。年に数回、季節のイベントを行う。

学校の中での不安などを、大学生と一緒に解決していくといったことをやっております。
私は学習者として 3 年～4 年前ぐらい、「LABO☆くにスタ」に通わせていただいており、そこで、このようなサポートを自分自身もやりたいと思い、支援者として今度は、今年の 5 月からやらせていただいております。ちょっと学習者が長くて、支援者側の期間がすごく短いので、ちょっと視点が偏っていたりするのですが。その中で、コロナ禍において自分が感じたことを今回お話させていただこうと思います。

「LABO☆くにスタ」の目的というか、どういった場なのかといいますと、まず、中高生の居場所としての場がありまして、それは先ほど言ったとおり、学校生活の中での中高生の悩みなどを一緒に解決したり、あとは、学校生活で言いづらいことってすごくあったりすると思うんですね。やっぱり集団なので、他の人とちょっと違った意見だったりすると、自分の意見を伝えると浮いてしまったりすることがある。そういったことを、身近に親身になって聞いてくれる大学生に、まず自分の意見を伝えてみて、どんな反応をするのかとか、そういったことを聞いたりすることもできたり、こういった意味での居場所となっています。

あとは学習としての場ですね。どのようなことをやっているかというと、中高生ですと、特に塾に通っている方も多いわけで、ただ集団学習の塾等は分からなかった問題も後々、先生に聞くとかしない限りは、自分自身で解決しないといけないわけですね。あとは学校での分からない問題も、身近に聞ける大学生というのがなかなかいないので、こういった場で、おのおの話して解決していけるような、そういった身近な場。今はちょっとわからないですが、昔、自分がいるときは、大学生に対して生徒 1 人で、一緒に切磋琢磨していくといいますか、問題を一緒に解いたりしました。

コロナ禍になって、どのようなことが問題になったかというと、もともとやっていた食事というか、お弁当を一緒に食べていたことがなくなってしまいました。より学習者と支援者の関わりが減ってしまいました。これによってコミュニケーションの機会が減ってしまって。居場所としての場というよりも、どちらかというと学習としての場の雰囲気が強くなってしまいました。現在の「LABO☆くにスタ」は、すごい学習意欲が高い方が多く、なかなか交流というか、交流が深まらない。あと、入りづらい。新しい方が来づらい雰囲気ができてしまっていて。そこがすごい問題だなと感じています。

あとは、公民館が休館になり、それに伴って「LABO☆くにスタ」も、しばらく休止になりました。自分はそのようなとき、「居場所としての場はやっぱり閉じていてほしくない」と思いました。特に、学校生活、学校もコロナで一時期休校になって、先ほどおっしゃってくださったように、生徒というか子どもたちが家の中にずっといる、ひきこもりみたいな状態になっていたわけですね。そうすると、人と人との関わりが少なくなってしまって、特に多感な時期は、人と人との関わりってすごく大事だと思うのです。そのような場が減ってしまっている状況で、学校も「LABO☆くにスタ」も閉じてしまっていると、やっぱりいろいろ不安だとか悩みだとかになって、ストレスがたまってしまったりすると思います。すごく難しいと思うのですが、「LABO☆くにスタ」は開いていてほしかった」なと、思っております。

あと、交流手段として LINE がありますが、これも中高生と大学生の LINE ではなくて、大学生同士の LINE が主になってしまっていました。コロナ禍の間、ずっと関わりがない状態だったので、すごく難しいですけど、コミュニケーションの機会が減ってしまったのが、大きな問題だと自分は感じております。

⑦公民館職員　針山 和佳菜さん[7]

【針山】職員の針山と申します。よろしくお願いします。

私は、公民館でしょうがいしゃ青年教室、今日、その参加者のメンバーも来てくれています。それから、中高生の学習支援事業ですとか、あとは平和・近現代史、公民館図書室、公運審の事務局などを担当させていただいております。

職員の立場から、コロナ禍はどうだったかということですが、まず、昨年の閉館してしまったときは、実は私、ここの現場にいられなくて、例の 10 万円給付金のお手伝いで出向することになってしまって、少

7　国立市公民館職員。社会教育主事。公民館在籍通算 6 年目（2021 年時点）。

しは公民館事業にも関わりますが、メインはそちらのお手伝いということになってしまったので、こんな大変なときに何で私、公民館にいられないのだろうという、すごいジレンマを感じていました。

今、みなさん、「やっぱり開いていてほしかった」、「つながりが大事」というようにおっしゃってくださって、やっぱり職員としてもそのような思いがある一方で、1人の個人として考えると、例えば、私は一人暮らしで市内在住なので、あまり感染のことを気にしなくて大丈夫でしたが、遠方から通っているとか、おうちに高齢の家族の方がいるとか、そのような職員の場合は、やっぱり感染のことが怖かったと思います。特に当初は、かかったらすぐ、どうにかなっちゃうんだよみたいな話だったと思うので、そのような怖さの中で、自分たちの職員としての使命と、1人の人間として、コロナという未知の災害と向き合っていけばよいのかというので、すごく揺れ動いていたというような記憶があります。

そういった中で、ただ一つ感じたことが、休館になる前から培ってきたつながりの強さとか、そういったものがあったからこそ、休館のときも、例えば、「しょうがいしゃ青年教室」では、スタッフの人と協力をして YouTube 配信で「コーヒーハウスラジオ」という、メンバーさんとスタッフのお手紙を公民館に寄せてもらって、「今こんなふうなことをしているよ」とか、「コロナで外に出られないから、おうちでダンスしているよ」とか、そういったお手紙をみんなで共有して、しかもそれを今度、お手紙の形でメンバーさん全員に送って、情報の交換をしたりとか、そういった工夫をしたりしました。そういったのというのは、それまでの関係性、公民館にお手紙を送ったら何か、みんなとつながれる、お互いの顔が見える関係性があったからこそ、できたことなのではないかなと思って。平時の、いかにお互い顔が見える信頼関係とか、つながりをつくっていくかという大切さというのを、改めて感じました。

ただ、一方で、いかにそういう関係性をつくっていくかというのは、講座とか決められた形のところに集まるだけじゃなくて、公民館って、すごく「余白の時間が大事」だなと思っていて。講座が終わった後に、隣の人と「この講座よかったね。ちょっとお茶していこうか」みたいなところから、関係性が培われていく。そこのきっかけづくりというのがすごく、公民館は大事なところがあると思います。それって「学習権」とつながってくる話だと思うのですが、職員としてどう保障していくことができるかというところが、このコロナ禍でも使命として考えていかなきゃいけないというのをすごく感じた 1 年でもありました。

今、山本君から学習支援の中で、子どもたちの居場所というのが、少し学習という方向になってしまっているのではないかという指摘がありましたが、それは担当としてもやっぱり感じている部分もあって。コロナ前は、地下ホールで机を島の形にして、お互いの顔が見える、何となくちょっとお話ができたりとか、ちょっと知り合いになれたりっていう工夫をしながらの配置でやったり、終わった後にみんなで一緒のお弁当を食べよう、そこから会話が生まれたり、それで仲良くなったりっていうのができていたのですけど、コロナ対応という、どうしても感染に気をつけながらとなると、席を教室形式にして、飛沫が飛ばないようにとか、お弁当を食べないでとかなってしまうと、どうしてもちょっと、何て言うのかな、一対一の関わりのほうが強くなってしまう、そういうのも感じていて。

そうした中で、また戻ってしまうけど、じゃあ、どうやってつながりというのを培っていけばいいのだろうという、そこの部分をすごく悩みながら向き合っているというところだなと思っています。

以上になります。

○コロナ禍において公民館にしてほしかったこと、今後してほしいこと

【長田】公民館にお願いしたいというのは、何かあったらどうするかということが、事前に予想というか、そういうことがある程度できて、それに対する準備、これは公民館だけじゃないですけど、そういうことが大事じゃないかと。コロナでいえば、アルコールの手指消毒とか体温計等は、随分たってから設置されたわけですけど、もっと早くからそういうものがあって、各部屋に例えば、消毒液を置くとか、拭くことができるとかというようなことが、きちっとできていればよかったかなと。それができなくて、利用できないというふうなこともあるので、そのようなことができればよかったかなというのはあります。

【片岡】私も似た印象を受けていました。やっぱり感染防止への対策とか意識を、消毒、検温の徹底とか、部屋別定員の水準設定とか、ちょっと怖く感じる部分があって。今年の夏は 2 か月位、ちょっと怖いから行きたくないなと思って、行かない時期がありましたね。

というのが一つと、もう一つ、「わいがや」の話になるのですが、基本的にふだんからしょうがい当事者の実習生の店員さんとの連絡を、公民館経由でしているのですね、それでお任せしてしまっていたので、実習生が公民館に来られない間の様子や、実習をやりたいか、それともちょっと怖いからやめておくみたいな、そのような気持ち等をなかなか把握することができなかったので、その辺を聞ける手段をつくればよかったかなと思っています。

【池田】公民館の閉館中のことにつきましては、外国人が間違えてというか、講座がないということを知らないで来てしまったような人に対するお知らせを貼り紙等で丁寧に伝えていただいたりとか、窓口に来てしまった方についても、とても丁寧に対応していただいたりとか、公民館が非常にとてもよくやっていただいて、感謝しています。

あと、公民館に期待したいこと、してほしかったことは、やはり、先ほど言いましたように、こちらで多少なりともサポートできる外国の人たちというのは、氷山の一角なので、実際に情報弱者になってしまっている方に、いろいろな広報活動といいますか、「公民館では何かこういうこともやっているよ」、「こういうグループも活動しているよ」みたいなことを、何かの形で知らせていただけるようなことがあったらよいのかなと。あと、「にほんごサロン」は公民館と共催でいろいろな、例えば、文化等、楽しいことを伝えたりしていますが、そのような形の共同でできることがあれば、さらに発展できるのかと思います。

あともう一つ、実際、オンラインでのサポート等をかなりしたのですが、「にほんごサロン」もオンラインで開催もしたのですが、ボランティアは、すごく高齢者が多いです。

それで、オンラインはできない、最初から参加できない人がとても多いので、ここで、やはり、公民館でオンライン講座、簡単な Zoom のやり方等、そういったことを、個人的には随分サポートしていただいたりした部分もありますが、全体でもしていただければよいなと思いました。

私、公運審の委員をやっていますが、『公民館ものがたり』という映画を長澤先生から見せていただきました。それはもうずっと、何十年前でしたっけ、の映画ですけど、そこで、オート三輪の運転の仕方を公民館で講習をやっていました。だから、本当にニーズがあることを、公民館が利用者のニーズに応じて助けてくれる、すごくいいなと思って。それで、コロナ禍の時、非常に多い利用者である私たち高齢者にとって、やっぱり弱点、学びたいことって、オンライン、Zoom などのやり方だったなと思いました。だから、そのような講座をやっていただけたらすごくありがたかったなと思っております。

【原】2 点ございます。1 つは、コロナ禍でお願いしたかったことは、実は私たち、ちょうどタイミング悪くというか、よくというか、総会がありまして。総会は実は公民館ではなく、会場がなかったので、福祉会館でも前からやっていますが、福祉会館も同じように閉館になりましたので、できませんでした。で、書面総会にさせていただいたのですが。実は毎回、その書面総会するためのはがきの印刷は、公民館でしていたのですが、残念ながら閉館になりましたので、印刷ができませんでした。やむなく個人のパソコンの印刷でやったのですが、結構しんどかった。ですので、印刷室の開放くらいはできればよかったかなと

いうのが１点でございます。

もう 1 点はコロナと関係ないのですが、実は私ども毎月 1 回、サークルの責任者を含めた各期の代表、責任者が集まっての会議を必ず行っております。180 名弱のメンバーがおりますので、月一遍はやっぱり運営の会議をしないといけないため、行っております。公民館の、長田さんの公利連にも関係してくるのですが、会場がなかなか決まらない。取れないのです、はっきり言いますと。やはり月一遍ですので、みなさんに連絡の方法もない。これが福祉会館ですと半年先まで予約できます。その辺の流れをもう一回検討いただいて、長期的な計画もできますので、そうすると、予定が早く決まって、みなさんに連絡できます。そのような体制も、できれば、これはコロナと関係ないですが、体制として公民館もつくっていただければ、計画的な運営、行事ができるかと思いますので、ご検討賜れば助かります。

【久野】私たち「ライフデザイン 2018」のグループとしては、公民館に特にどんなことをしてほしかったかということは、意見としてあまり出なくて、むしろ開館した後に、保育室もすぐ開室してくださったりして、活動再開の原動力になりましたし、外出自粛がまだ続く中で、すごく励みになって、みんな、ありがとうございますという気持ちでおります。

他に出た意見としては、最近講座の多くをオンラインで受けさせていただけるようになっていて、それもすごくありがたいです。また今後、長期間閉館したりすることがあれば、ホームページや、『公民館だより』で、講座のお知らせ以外に、お勧め本の情報等、そこだけで発信していただける情報もあると、活動のきっかけにもなるし、いいかなという意見も出ました。

私個人としては、オンライン講座は、私たちグループのメンバーが、今回 12 月 5 日号の『公民館だより』でも原稿を書いているのですが、子どもの相手をしながらオンライン講座を受けているという様子が、すごくリアルに感じられる文章で、そうやって、すごくドタバタしながらも、どうしても聴きたい講座を聴くことができるというのがすごくありがたく感じております。ありがとうございます。

【山本】「LABO☆くにスタ」からは、先ほども言いましたが、ちょっと無謀ですけど、「開いておいてほしかった」っていうのがありますね。先ほど言ったのは精神的な面ですが、もう一つ、学習的な面で開いていてほしかった理由としては、学校が休校しているのにもかかわらず、塾は開いていたのですよ、あの時期。その中で、塾とかに行ってない方々というのは、この「LABO」を頼っている方も結構いらっしゃいますので、そこで学習面で差がついてしまうと、その後の学習にすごい差ができてしまって。休み明けとか不安に思う人たちも多かったと思います。なので、難しい話ではあるのですが、どうにかして「開いていてほしかった」なって思いました。

そのために、先ほどもみなさんがおっしゃっていましたが、消毒だったり、マスクだったりと、飛沫感染の対策といった、対策に対しての行動を、もう少し早くできていればよかったのではないかと、自分は思いました。

【針山】そうですね。やっぱり、いろいろな災害とかコロナ禍のような状況と向き合う時に、これから職員としてどういう意識を持っていけばよいのかなというのを、ずっと考えていまして。

この間、12 月の頭に徐京植先生（東京経済大学教授）をお呼びして、「いま、求められる想像力」というテーマでお話をしていただきました。その時に徐先生から、「共に悩み、共に泣き」という言葉をキーワードとして出していただいて。やっぱり誰かが誰かのこと、その当事者になり切るというのは難しいですが、でも、やっぱり想像をして、その人だったらどういうことを求めているのか、どんなことに悩むのかというようなことを、一緒になって考えて、一緒に悩んで一緒に泣くしか、そういう姿勢しかないのだというようなお話をされて、その言葉がすごく私自身の胸にすとんと落ちたというか、すごく響きました。やっぱりそれって、公民館の職員として市民の方と一緒になって歩む、行政面ではあるけれども、でも、私自身も一市民ですし、市民にとっての公民館というのが何かというのを常に考えながら、そういった災いに立ち向かっていかなければいけないなというのをすごく感じました。そういった姿勢で、これからみなさんと歩んでいきたいなと、すごく感じているところです。

第２部：パネルディスカッション

【司会（高野）】第２部は第１部の内容を踏まえまして、いろいろ深掘りしていけたらと考えます。進行を公運審の長澤委員に交代させていただきます。

【司会（長澤）】あらためまして、後半の部分を担当いたします長澤でございます。昨年 11 月から国立の公運審委員になりまして、それまでも国立市に時々来まして、お話をさせていただいたり、国立の公民館活動からはいろんなことを学んできたのですけれど、やはり公民館運営審議会の中に入ると、また違った景色が見えるというか、また、今は答申に向けてみなさん頑張っているところなので、私も毎回勉強させていただいているというか、とても刺激的だなと思っています。

今日も 7 人の方に、「コロナ禍の中の学びとつながり」ということで、報告をしていただきました。自己紹介、それからコロナ禍の活動、それから公民館への期待ということで、率直に語っていただいて、何か私はこの報告をそのまま記録に残せば、答申の一部になるのではないか、そんなふうに思うほど、みなさんのお話がよかったと思います。

「公利連」の長田さんからは、もう活動ができない、総会もできないという大変な中で、人が集まるということがどれだけ大事なのかということをお話していただきましたし、それから「喫茶わいがや」の片岡さんは、2つのジレンマと言われて、本当にそれが伝わってくる中身でありました。長期の休みを強いられる中で、「喫茶わいがや」が社会的に果たさなければいけない中身と、しかし同時に、しょうがいを持った方たちや、そこに集まってくる方たち、青年たちの心の居場所と身体・健康を守るという、大変なジレンマ、思いを片岡さんが語ってくれました。

池田さんは外国の方たちへの日本語サポートということで、「KUNIFA 日本語サポート」のお話をしていただきましたけれども、例えば、学校からのお知らせということを、大変分かりやすく語っていただきました。子どもたちは、日本で生活すると日本語がどんどんうまくなっていきますけれども、親は、外国から来るとなかなか日本語ができないという状況の中で、学校からのお知らせを理解することができないわけですよね。外国の方たちは当然、防災のことも今日出ていましたけれども、災害の時だとか、今回のコロナ禍の問題、あるいは様々な情報、外国人であり日本語を母語としていないがゆえに、情報弱者という状況に置かれているということを語っていただいて、これも私たち公民館のとても大事な視点だと思うのですね。

それから、「心遊会」の原さんですけれども、もう 42 年間の伝統ある、歴史の長さといいますか、それが伝わってくるようなお話でありました。現在最高齢は 94 歳ですか。61 歳から 94 歳という、すごく頑張ってらっしゃって。やっぱり人と会うことというのが元気のもとなのだという、それが基本だと思うのですけれども、しかし、そういう中で合唱もできない、ということもお話ししていただきました。やっぱり集まって、お互いが助け合っていくというような、そういうことの大切さというものもお話しいただいて、お互いに見守りながら、お互いに助け合いながら生きていくということの大切さもお話しいただきました。「長生きしたければ心遊会に来い」というのは、なかなか名言だと思いました。

久野さんからは、「ライフデザイン2018」の活動なのですけれども、最初はコロナ禍でも、あまり支障が

なかったのでは、というお話もあったけれども、しかし実は、LINE をよく見ていただくとそうではなくて、大変行き詰まっているような状況だとか、あるいは小学校も、実はこの問題も私たち公運審の中で、国立の学校ってどうだったのだろうかということも、検証作業の中に入っているのですが、学校がどうだったのか、休校になったり休園になったり、そういう中で、子育て中の女性たちがいろんな問題を抱えている、子連れで行ける場所もない、というお話もありました。

それから、中高生のための学習支援という山本さんのお話ですけれど、あらためて考えると、国立って本当に子どもから高齢者まで、全ての世代にわたって公民館自身が、いろんなつながりを持っているなと思ったのですけれども、中高生のための学習支援を、学ぶという学習支援と居場所の存在、居場所の機能といいますか、食べながらいろんな交流をするとか。しかし、それがコロナ禍で、できなくなってしまったというお話もありました。これでいいのだろうか、人と人との関わり合いがなくなってしまったというような、そんなお話もございました。

そして最後は、公民館職員の針山さんですけれども、針山さんも、素晴らしいお話をしてくださいました。いろいろ悩みながらも、公民館職員としてどうやって市民の学びを支えていくのかという、本音でいろいろお話をしてくださったと思います。閉館中は 10 万円の給付事務で出向されたという、私の住んでいる船橋の公民館職員は、保健所に行くということで公民館が休館になるという、それが全国で起こったわけですけれども、でも果たして公民館職員として、公民館がこういう状況の中で、一体何ができて、何ができないのか、あるいはもっとできることがあったのではないかという、そんな気持ちも伝わってくるようなお話でありました。

これからは、ぜひフロアのみなさんからも質問とか意見を、例えばどなたかに質問しますとか、あるいは 7 人全体にこのことを聞きたいとか、そういう質問でも大丈夫です。この会は 4 時までですけれども、最後の時間に 7 人の方から、また一言ずつお話をしていただきますので、その中で、例えば 7 人全員への質問なら、そこで答えていただく、ということで、少しやり取りをしながら、フロアのみなさんとすすめていきたいと思います。

質問を受ける前に、7 人のみなさん、それぞれお互いに話を聞いて、何か「心遊会」にちょっとこういうことを聞いてみたいとか、例えば、職員の針山さんにこういうことを聞いてみたいとか、何かお互いに、あるいは補足でもいいです。本当はもっとこのことを言いたかったのだけれど、ちょっと時間がなくてお話しできなかったというようなこともあるかと思うので、補足でもいいですし、他のパネラーへのご質問でもいいですし、あるいは自分の意見でもいいです。みなさんの意見を聞いて、本当はそうだよなとか、そこはどうなのだろうとか、公民館への期待ということも率直に語っていただいたのですけれども、フロアからのご質問、ご意見の前に、パネラー同士で何かございましたら、どうぞご自由に出していただければと思います。いかがでしょう。では、原さん、お願いします。

○公民館で人と会うこと、信頼関係をつくること

【原】なかなかみなさん質問しにくいと思うので、私のほうから逆に質問いたします。

針山さんのお話聞いていて、私も同じ意見だったので、続きで話します。公民館の役割っていいますかね、先ほど最初に末光さんからお話があった 3 番目の、「主体的に学び、生きる」ということが主語になっていて、その後、「公民館はどのように支えるか？」と疑問符がついていますけれども、そこの答えが、実は公民館の建物をどう利用するかというよりも、確かに場の提供、講座の中から人間関係がつくられる、これ、非常に大事だと思います。実は、これ、私ごとで本当に恐縮ですが、なぜ私がこの「シルバー学習室」に入ったかというと、実はその 2 年前、妻を亡くしました。それで、冗談じゃなく本当に、その当時、がんの死亡率と、奥さんを亡くした 60 歳過ぎの男性の死亡率、5 年生存率と一緒なのですよ。女性は逆に、旦那が亡くなると元気になるのですって。ところが男性は、奥さんを亡くすと、5 年生存率ががんと一緒だったのです。私もこれじゃいけないなと、何か探してっていうので友だちから誘われて、この「シルバー学習室」に入った。それで友だち関係がいっぱいできて生存しています、いまだに。生きています、死なないで。何とか生きています。

実は、この歳になって、この歳って実は今、73 歳です、この歳になって親友ができました。友だちが。普通ね、若者っていうのは親友できます。友だち。子どものときも、小学生の友だちいっぱいいます。中学、います。高校、大学もいっぱいいます。しかし、こんなジジイになって、友だちができると思いませんでした。親友ができました。なぜか。やっぱりこの場ですよ。場ができて、そこで交友関係ができて、信頼関係ができて、そこで対話が生まれてきた。本当の人間関係ができました。これが人間にとって大事じゃないかなと思いました。そのきっかけをつくってくれたのが、私は公民館です。

この講座というのは、公民館の建物が、大事かも分かりません、だけども、その中でつくられている、この人間関係のつくられる講座、それがやっぱりきっかけ。きっかけづくりが、私は公民館の大きな役割じゃないかな、こう思っておりますので、多分、針山さんおっしゃったのは、そういうことですよね。じゃないかと思い、追加で、私が体験で感じたことを話させていただきました。以上です。

【司会（長澤)】今のお話で関連して、パネラーのみなさんいかがでしょう。

【片岡】友だちができたという話ですけど、僕も職場が結構、仕事が分かれていて個人個人で、全然仕事中、会話がないのです。なので、その鬱積したマグマを、土日にここに来て話しているみたいな感じです。だから、本当にコロナでね、職場でもなかなか、ちょっと深い関係とかできないし、そのような中で、公民館で知り合いに会うっていうのがなかったら、自分もどうなっちゃっていたんだろうって思うようなところ、ありますね。

【針山】やっぱり公民館の中で出会うっていうのがすごく、大事なことだなって思っていて。というか、私自身にとっても、公民館で人と出会う、やっぱり「しょうがいしゃ青年教室」を担当する中で、片岡さんみたいなスタッフの方と出会って、それは、何というのか、職員とボランティアのスタッフという関係性だけではないのじゃないか。それが私の片思いだったらごめんなさいって感じですが、そう思っています。やっぱり本音で話し合う、この活動をどうしたいという思いを話すこともできますし、それ以外の自分のプライベートな悩みとか、こういう思いとか、そういったところも含めて語り合うことができるというのがすごく、私自身が公民館職員になってよかったなというふうに思っていることです。

一緒にボーリングに行ったりとか、映画に行ったりとか、そのようなことも多分、普通に勤めている中では起こり得なかったことだと思うのですけど、でもやっぱり公民館で仲よし、友だちになれたからこそできる。それっていうのは、先ほど自分が言った「余白」っていう部分、その関係性を培うというところにつながっていくと思っていまして。信頼して、この人だからしゃべれるとか、この人だと分かってくれる、そういったものがないと、何というのか、活動に対する意見とか思いとかも言えないのではないかというところもあるので、すごく大事なんじゃないかなと感じています。

【司会（長澤)】ありがとうございます。「公民館で人と出会う、友だちができた」、あるいは「親友ができた」という、いろいろ本音で話せるような関係というのは本当に大事だと思います。だからこそ、コロナ禍で大変な思いをみんなしたわけですけれども、その一番大事な部分をどうやって、公民館でつくっていくのかということだと思うのですよね。何か関連してございませんか。

【池田】ほかの方の繰り返しになってしまいますがが、私も公民館に来るようになって、何か自分と違う年齢や、違う国籍のいろんな方とつながれるっていうのが、とても大きな財産になったなと思います。学習者さんで、初めてサポートした方が、もう卒業して今は中国語の先生をしているような方が、息子さんの「受験のことでちょっと相談に乗ってくれない？」なんて連絡をくれて、お茶をしたり。あと、同じボランティアの仲間同士でも、ずっと年上の方で、とっても積極的に活動されていて、いろんなことを学ばせていただけるような、尊敬できる先輩がたくさんできました。そのような意味では本当に、自分の一生の財産が増えているような気持ちがして活動しています。

【長田】私が公民館、ここにいること自体が、非常に何か面白いのですけど。私は 1995 年から、公民館を利用させてもらっています。絵を描いているのですが、好きな絵のサークルでここを、だいたい毎週 1 回ぐらい使わせてもらっていたのですが、それが時々、活動がなかったりというようなことがあって。使えるか使えないかっていうようなことがありました。当時の代表の人が、車椅子の方で、十分に「調整会」とか来られないので、私が代わりに出たりしているうちに、「調整会」に携わるように。そうしたら、やっぱり何か自分の好きなことだけでなくて、そのようにつながってやっていかないと、地域のことがうまくいかないとか、雰囲気がよくならないとか、そのようなことがあるのかなという面で、ボランティアで「調整会」のお手伝いしたり、あるいは交流会をさせてもらったりしています。

本当は私、人付き合いがあまり得意なほうではないのです。ですから、話すこともそんなに得意でなく、でもまあ、エネルギーを出してやることが、やっぱり一つの、何ていうかな、自分を豊かにさせるきっかけになったんじゃないかなと、今、改めて話をしています。

【久野】今、みなさんのお話を聞きながら、昨年のコロナが大変になり始めた時期のことを思い返していたのですが。その頃に、コロナウイルスに対する感覚や感じ方や危機感が、すごく個人個人で差があって、ご家庭でもすごく差があって。みんな最初はそれに関して話し合うことに、何か抵抗があったように感じたのです。でも、この「ライフデザイン2018」のグループもそうですし、「喫茶わいがや」や「コーヒーハウス」もそうですけれども、割と早い段階から、みんなが「そういう気持ちを話しましょう」、「お互いに今どのように感じているかを話しましょう」っていうことが始められて、それはやっぱり、針山さんがおっしゃっていました、「平常時に培ってきた、お互い意見が違うことも受け入れましょう」、「自分の正しいと思うことは相手に押しつけないで、みんなの意見を聞いてやっていきましょう」という、その信頼関係ができていたからだろうなと思います。だから、何か大変なことが起きたときに支えたり、救ってくれたりするのは、やっぱり平常時につくっていた人間関係なのだなと思いました。

【司会（長澤)】本当にそうだと思いますね。針山さんも久野さんも言われましたけれども、言わばコロナが起きる前の、平時といいますか、日常の中で培ってきた関係性みたいなものが、こういう大変なときに生きてくるというようなことが、やっぱりあると思うのですよね。本当にその通りだと思います。

実は、原さんは 2 年前と言われたのですけれど、私は実は 6 年前に妻を亡くしまして。先ほど 5 年生存説と言われましたよね。私もそういう噂が、周りから伝わってきてですね、そしたら 6 年たったので、今は何とかちょっと安心しているのですけれども、本当によくお気持ちは分かります。

それでは、フロアのみなさんから、どうぞご質問でも、ご意見でも、ご感想でもいいですし、せっかくの機会でありますから、どうぞ。それからお手を挙げたときに、もし差し支えなければ、所属とお名前をお話しいただいて、別にお話ししたくないということであればいいのですけれども、あるいは国立のどこに住んでいるとか、そんなことも含めて言っていただければと思います。

○会場参加者からの質問・感想・ご意見等

【会場Ａ】私は「ひらやの里、ひらや照らす」を運営しているＡと申します。公民館でやっているほどの規模ではないですけど、子どもから多世代、老人、全てやっています。また、難病の方、ひきこもりの方、あるいは学校に行けない方、そのような中で、コロナがもろに、昨年の 2 月頃、印象に残っています。もう、どうやったらよいか何も分からない状態で、取りあえず閉めました。料理もやっていますから。それで 5 月に開けて。一方、公民館はかなり早い時期からやったということで。このテーマの「コロナ禍における学び」というのと、一般的な公民館に対する期待の話が入っていて、このテーマではっきりと、我々は苦戦しました。ちょっとね、みなさんの要望は分かりますが、ちょっと弱い感じがしました。それが 1 点ですね。

一方、国立市公民館は、4 月から 5 月位、2 か月ぐらい閉館しました。いろんな制限が出ましたけど、要は、言いたいのは、未曽有のコロナ禍で起きたことをどう捉えて、それぞれの対応で話をしなければ、一

方的にそれなしで話し合うっていうのは、非常に、欠けた点があるんじゃないか。その中で何が自分たちはできるのか、対応できたのか、そのような話を強く知らせてもらいたかった。

私の経験で言えば、語ることたくさんあります。もろに、それって、あるいは勉強もしました。Zoom の関係もみんな勉強しました。公民館に頼るのではなくて、自分たちの力でやっていくと。このような力強い発言を希望します。

【会場Ｂ】針山さん、暮らしの中で、これ大変だったなとか、そういうことは、コロナのおかげでこういう考えが変わったということはあったかを聞きたいのですけれど。

【針山】やっぱりコロナの中で大変、職員として大変だったというところは、何度も繰り返しになってしまうのですが、つながる機会がなくなってしまった中で、どのようにつながりをつくっていけるかなというところと、あと休館後、一旦 4 月から 5 月にかけて休館してしまった後、コロナの対応をしながら公民館の事業をやっていきましょうねというときに、今までのやり方ができない中で、どうやって講座とかを進めていくかというところがすごく、やっぱり難しかったし、大変だったなというのがあります。

特にオンライン併用っていうのが、コロナ明けの講座でやるようになっていったのですが、それはやっぱり私たち職員も、さっきＡさんが一生懸命勉強しましたとおっしゃっていましたけど、私たちも、それまで Zoom とか使ったことがなかったので、そういったものを勉強しながらやっていこうっていうのも、大変だなというのがありました。それで Zoom によって、先ほど久野さんがお話ししてくださったみたいに参加がしやすくなった、あるいは、今まで遠方でお呼びすることができなかったような先生を、講座で呼ぶことができるようになったというよさがある一方、やっぱりオンラインだけでつながれればよいというものでもないよねっていう、対面のよさみたいなものもあるので、そういったジレンマというか、難しさが常にあるなというか、今もあり続けているなと。そんな感じで大丈夫でしょうか。

【会場Ｃ】今日のパネルディスカッションのテーマが「学びとつながり」ということなので、だから答申のほうも、教育機関としての公民館ということを諮問されていらっしゃるようなので、私は学びのほうのお話をしたいです。

実は私たちの団体で少し前に、やっぱりこのようなコロナ禍でどうだったかってお話をしようという集まりをやりました。で、報告してくださった方が、普通の読書会のサークルです。そうすると、4 月、5 月休館したから、やりませんでした、その後は普通にやりました、こういう団体が多いのではないかと。公民館を利用する団体として。その 4 月、5 月に私自身は、誰と話したいかというときに、「哲学読書会」って、このコロナ禍でどう考える？　思想的にどう考える？　なんてことを話せる人たちだと思ったので、一番話したかったのです。会いたかった。そのサークルの人たちと。というのがあって、その後は無事続けられています。

それで、講座についても、いつもいろんなよい講座を公民館がやってくださっているのが、ぱたっとなくなった。休館中はもちろん。その後もなかなか大変だったと思うので、そんなに数も多くはならなかった。「私が行きたい講座はないぞ」みたいな状態があったので。それで、今、無事にやれているというところで、「休んでいた、できなかった、それは何だったのか」というのが私の中に残っているので、「学ぶ社会教育施設として公民館はどうだったのか」というようなことも、考えていけたらなと思っています。

それぞれつながりをつくるというところで、すごいいろいろ悩み、頑張っていらっしゃるかと思うのですが、学ぶ市民として公民館に期待しているところから、発言させてもらいました。

【会場Ｄ】心遊会のＤでございます。「ライフデザイン 2018」の久野さん、私が 40 年前にここで同じように、「主婦が働くとき」という講座を受けて、公民館に 2、3 歳の子どもたちを大切にしてもらって、大変よい講座だったので続けられたということがあります。それで、今、活動していらっしゃるということで、何を申し上げたいかといいますと、およそ 40 年たっているのですけども、今、「心遊会」に所属して、一緒に役員をやったり、そのような人たちとまた再会したりしておりますので、どうぞ頑張って活動

を続けていただきたいというエールでございます。失礼しました。

【司会（長澤)】そのエールに応えて、久野さん、何かありますか。

【久野】ありがとうございます。本当に励みになります。私たちもまだ、自主活動グループとして始めて3年ちょっとですけれども、何とか続けてこられて、これからもできる限りは続けていきたいなと思っています。ちなみに、どのぐらいの期間、その活動を続けられていたのですか？。

【会場Ｄ】講師の先生でも、今ちょっと老年で輝いてらっしゃるって言ったらよいのかどうか、樋口恵子さんら、もう燦々と輝いていらっしゃる頃だったのです。それで、すごくよい講師をたくさん呼んでくださって、主婦が働くことに対して賛成側の人、いや、それはそこまですることはないだろうという外務省の方もいらっしゃったし。それで、講座としては 1 年ぐらい、その時のメンバーが 13、4 人いたと思いますが、ほとんどみな働きに、仕事をする人になりました。

それで、途中いろいろ、みなさん子育てとかあったのですが、そのような中でも、何らかのつながりを持っていて、そして現在、60歳になって「心遊会」に入って、「あなたと出会ってまた役員をやることになったわね」っていう、そこには、やっぱり信頼関係というか、40 年の間、国立市民であったその信頼関係が消えることがなくってですね、役員をやって「心遊会」の 175 名のために働くことができるっていう喜びがあると思います。

【司会（長澤)】ありがとうございました。あらためまして、先ほどのご発言もございましたけれども、今日の学習会は「コロナ禍における学びとつながり、公民館の役割と期待すること」ということで、フロアのみなさんといろいろ意見交換をしたいという場として設けております。忌憚のないといいますか、率直なご意見、ご感想、ご質問等を出していただければと思いますが。他にいかがでしょうか。どうぞ。

【会場Ｅ】「KUNIBO」のＥと申します。池田さんと同じく、外国の人たちのボランティアをしております。今日いろいろお話を伺って、活動の多様性というのがあると感じました。それに気がついたのですけれども、私たちの対象は外国の人たちなので、昨年の４月、５月のお休み、休館に関して、本当は、私たちはとてもうれしく思いましたし、外国の人たちもとてもうれしく思っていたと思います。なぜかというと、2月ぐらいから公民館にはもう行かない、自粛したいという申出が何件かありました。それで、無理やりにお誘いするのも悪い、だけれども、このつながりを、やはり絶ってしまうことに結びつくようなことは、やっぱり避けなければいけない。特にマイノリティの方たちなので、そこはしっかりとケアしていきたい。ということで、すぐに公民館の協力を得まして、オンラインを始めました。

おかげさまで多くの方たちが参加されて、いろいろご意見を伺うことができて、それで今も、対面があり、オンラインがあり、両方うまく運営ができていると思っているところです。

【会場Ａ】このコロナ禍で最大の得たことは、いかに居場所が必要であるか、それから対面することが必要であるかということを実感、これは最大の成果だと思います。それに関して、休んでいる間がどうだ、できなかったこうだじゃない、むしろそれのために、その後どうやってもっと強くするのだという、そのような気持ちを持てたのが、最大の成果だと思います。これだけのことを、なぜ開けなかった、どういうことができなかった、そんなことは別の問題であって、むしろ期待するとすれば、公民館の教育の場としての主張として、市の行政等へ、どれだけ意見を言ったかということを、むしろ聞きたいですね。

公民館は、市の組織がたくさんある中で、横のつなぎでいろんなきっかけをつくっている、素晴らしい機能を持っているわけです。それが、このコロナ禍でどう機能したか、どう働いたか、あるいは 10 万円の支給で、全体でパワー不足だから、針山さんがやりたいけどできない、これも現実ですね、その中でどのような事をやったか。むしろそれをお聞きしたいと思います。

あとは市民の方、原さんがおっしゃったように、我々も印刷機使えなかったことが参りましたね。ま

あ、何十倍も大変になってしまう。それは本当に切実な気持ちでしたけど。このぐらいだったら、何とかカバーしてやってほしいよとは思いました。他のところを当たったのですけど、駄目で、泣く泣く有料印刷サービスで費用を払うことになりました。

以上、公民館としてどう市に投げかけたか、巨大なテーマで簡単ではないと思うんですけど、多分それが、コロナ禍で学びをどれだけ主張したのかということにつながる、大きなみなさんの関心じゃないかなと思って、聞きました。

【司会（長澤)】大変大事な問題提起だと思います。公運審でＡさんが出されている「絆だより」や「ひらや照らす通信」も配っていただいており、私も読ませていただいております。

公民館が持っている居場所の機能をもっと強くしていく、あるいはつながりをもっと強くしていく、あるいは学びの場としての公民館というのを、こういう状況の中でどうやってつくり上げていくのか。そういう意味で公民館が、コロナ禍において市の行政に対してどのような働きかけとか、意見を言ったのか。このこともきちっと検証し、確かめていくということが必要なのではないか、ということですので、パネラーの方で何かそれについて、ご発言があれば、あるいはフロアの方でもお願いしたいと思いますが。いかがでしょう。

【片岡】Ａさんがおっしゃっているのは、公民館から市に対して要望したかというお話ですか。それとも我々から、公民館に対して何か要望したかというお話ですか。

【会場Ａ】私が言いたいのは、公民館、あえて言えば、石田館長がどれだけ抵抗しましたかと、そういうことです。

苦しい状態ですよ、やっぱり簡単にいくと思いませんけど。これだけみなさんが重要だと言っている、それを受けたら、やっぱりそれが行動じゃないですかね。それなしにね。

でも、2 月の時点で僕は行動できなくて、はっきり言って僕自身だって、あの時点で緊急事態宣言が出て、翌日料理の活動をやるってことになっていたのです。まず、料理、どうしているのだ、まだ手配してないっていうから、どうか分からないけど、とにかく止めました。全部止めて、それからあと様子を見ようということで、しばらく様子を見ていて。とはいっても、借りている部屋ですからね、感染対策はしなきゃいけないから、常時、人は誰かつけて、ずっと見て、やってきました。

今度、再開しようとしたときには、一方ではそう簡単にはね。一回事故が起きたら大変だから、それなりの準備をそろえてやりました。それは我々のレベルですよ。だから、大変さはよく承知しています。私自身も、市が特別対策室やっている、何を審議しているか、やっている会議録、全部取り寄せて見ました。でも、ちょっとあれですよね、はっきり言って事務的な、これだけの状態では仕方がないでしょうけど、あんまりそういうところまで配慮は至っていなくて、まずはとにかく事故を起こさない、まあこれしかないと思いますよ。そんなことです。

【原】石田館長はなかなか言いにくいと思いますので、私、実は、今、Ａさんのおっしゃったことについて、石田館長と一緒に市長に会いに行きました。そうだね、館長。実は「心遊会」の役員と一緒に、石田館長とそろって市長と会談したのです。

何をお願いしたかといいますと、一つは、「心遊会」のことじゃなくて、市民の団体としてお願いしたことがありまして、それは、今、Ａさんがおっしゃったようなことを含めて、一番困ったのは、「心遊会」のメンバーとかいろんな方に、いろんなことをお知らせするのに方法がなかった。これは、できれば、これから国としてもＩＴについて力を入れてくるので、国立市のホームページのどこかに、市民団体が使えるようなホームページを作ってもらいたいと。そうすると、そこに各団体がメッセージを入れられるじゃないですかと。そこにいろいろ各団体のホームページが、下付けになるような形で作ってもらえれば、管理していただけませんか、そういうような形でと。そうすると、いろんなメッセージがそこに、各団体が入れられますので、そういうようなことを、できれば市として考えていただきたいということを、まず 1 点

お願いしました。
　もう一つは、今日初めて各団体の方とお会いしているのですが、意外と国立市には団体がいっぱいありますが、横の連携ができていない。やはりこれは市が主導して、団体が横の連携を取って、お互い同じような目的を持って進められることがあれば、そのような組織というのも、やはり市としてつくっていただけないでしょうかということもお願いいたしました。そういうことを運営としてお願いできればと。
　それと、公民館として、印刷のこともお願いしました。できれば公民館は、いろんな市民の団体が一応、便利に印刷させていただいています。だけれど、印刷機も古くなってきましたので、今、市役所にある印刷機は、自動で、ホチキスで留めもしてくれます。このように便利な印刷機の使用についても、できれば市民団体が使えるようなことをさせていただけませんかということを含めて、お願いをしてきました。もっと細かなこともあるのですが、大まかにそのようなことを、市長にお願いしてきました。

【会場Ａ】今、原さんがおっしゃたように各団体の横連携、大事だと思います。「絆の会」は 5 年前から始めて、居場所とか含めて、市の横の展開、懸命に各団体に呼びかけてきました。行っている人たち、同意している人たちから、私に情報を寄せてもらって、出していました。市にも出していますよ。あるいは、我々は居場所ガイドブックを作った。それ、市の責任で作ったのですよ。そこのメンテは何もしていない。我々は、一時はちょっと、3万円ほどもらってやりました、その後は自分たちでファンド見つけて、試作版を作りました。その後、いろいろ提案したけど、社協にも出した、市にも出した、動いていません。公民館にも出しました。これは非常に悔しいです。あれだけ、「くにペディア」の大人版を作りたいと、かなり時間かけてやりましたし、市議会議員にも全部出して、アンケートを取りました。
　要は、言いたいことは、待っているのでなく、もの凄い力をかけているのに、そのかけたわりには、まだ僕らの信頼も足りないし、力がないのでしょう。だからみなさんの力が欲しい。ぜひ「絆だより」を、「絆の会」をサポートしてもらいたい。ほかのところは金もらっているが、我々は自費でやっている。だからこそ言いたいこと言っているのですよ。ということで、ぜひお願い、協力してもらいたい。

【司会（長澤)】ありがとうございました。できる限り多くの方のご意見、ご感想、ご質問等をお聞きしたいので。どうぞご自由に出してください。

【会場Ｆ】ちょっと苦言みたいなこと言うけど、針山さんだったりなんか、コロナ禍の時に外回りで動いたりなんかしているけど、あれ、男性職員は何やっていたのかな。それとも、針山さんに全部任せていたの。男性職員は楽してんのかな。

【針山】職員はみんな、それぞれできることを頑張ってはいたと思います。

【会場Ｇ】今、文教大学から社会教育実習生として、国立市でお世話になっております。第 1 部のほうでは、パネリストのみなさんの貴重な生々しいお話、ありがとうございました。
　そこで、1年半を振り返った、いろいろな話を聞けたのですが、最初のほうで末光さんもおっしゃっていた、やっぱり振り返ることの重要性、フィードバックして次に活かしていくということが、やっぱり重要になっていくのかなと思います。そこで、全体への質問になってしまいますが、今後またコロナウイルスが流行してしまった場合とか、それ以外に新しい何かしらの災害が起きてしまう、そういった場合に、今回のこの振り返りを活かして、どのように対応していくのかとか、考えているのか、準備をもう既にされている可能性もあると思うのですが、そういったところ、どのように、今、対応、準備しているのかというのを、みなさんにそれぞれの視点でお伺いしたいなと思います。お願いします。

【司会（長澤)】それは最後にみなさんからお聞きしますので、その時でよいでしょうか。それまでいろいろ考えておいていただいて。なかなか難しい質問のような気がしますけれども、とても大事なことだと思います。私たちはそのために今、公運審が、まさに今言われたことを答申として、やっているということ

だと思うのですけれども。ほかにはいかがでしょうか。

【木島（公運審）】中地域で、「たまご（多孫・他孫）食堂」という子ども食堂をしています。中の地域の活動で 2016 年から、「なかなかいい会」というのを開催しておりまして、2019 年 6 月から子ども食堂をしています。

子ども食堂をしていながら、公民館も中地域にあるので、毎回チラシは公民館にも置かせていただいているのですが、今日ここにいらっしゃっている方たちの団体に、直接お話ししに行ったり、こんなのやっていますって言いに行ったことなかったのですね。それで、わいがやさん、青年室とか、ライフデザインの久野さんとか、山本さんとか、みなさんにも会ったことがなくて。でも、今日お話を聞いてみたら、コロナの中で、こうやって若い世代の方たち、関わる方たちも、こんなに困っていたり、居場所がなかったりしていたのかということに、初めて気づかされました。

国立市は、コロナが起きたときから、「子どもの食支援事業」というのを立ち上げて予算をつけ、子ども食堂を開いてくださいという形で、市内にある 9 つの子ども食堂に、積極的にオープンするように働きかけられました。私たちは中防災センターで活動しているので、公共の場所では作ることも、食べることもできなかったので、その中でも工夫しながら活動を続けて、今では 100 食ぐらいのお弁当が毎回出るんですけれども、そんな活動をしていって、本当に困っている人に届いているかなとか、いろんなことに疑問を持ちながらもやっていたのです。

学校に毎回、「子ども食堂マップ」というのが配られたので、小中学生は大体そのマップを持っていて、子どもだけでも来ることがありました。なので、このような情報を、公民館にももっと積極的に、私たちが働きかけるとか、あるいは針山さんたちにお願いして、もっともっと積極的にお伝えできたらよかったかなと思ったのですが、こういう情報があったら役には立ちましたかと、質問したいと思います。

【山本】その子ども食堂に行ったことがないので分からないのですが、自分、妹がいまして、妹とその友だちがたまに子ども食堂に通わせていただいている時期があったので、話は少し聞いていました。高校生になるとちょっと行きづらいと思うのですけれども。中学生のみなさんだったら恐らく、チラシとかだけじゃなくて、多分来ていただいて話すことができれば、もっと興味を持っていただけるので、先週の水曜日も、オンブズマンの方がチラシとかを持っていろいろ紹介してくださったので、多分そういう形で来ていただければ、「LABO☆くにスタ」の中高生のみなさんも、また興味を持っていただけると思うので、ぜひ今度、水曜日に来てくださると助かります。

【司会（長澤）】「絆だより」を読んで、私、国立に 8 つの子ども食堂と書いてあったのですけれど、木島さん、9 つということなのでしょうか。7 万 6 千人のこの国立で、9 つの子ども食堂があるというのは、僕はすごいと思いますね。私の船橋は、人口 63 万人で今は 5 つぐらいですから、多いと思います。全国には 5,000 前後あると思います。

子ども食堂は今、例えば大人食堂が生まれてきたりとか、KUNIFA の池田さんのご報告もありましたけれども、地域の外国の方たちが関わっていたり、地域にとって非常に大事な居場所になってきているということがありますよね。だから、子どもだけではない、いろいろな広がりを持つ、可能性を持った取組だと思います。あと、二、三いただいてから、最後、7 人の方にお話をしていただきたいと思います。

【江頭（公運審）】今日はありがとうございました。私たち公運審は、公民館の民主的運営を担保する役割として、市民の代表として 15 人で活動しています。先ほど原さんが館長さんと一緒に市長に話に行かれたという話がありましたが、本来であれば、私たち公運審が、館長さんと一緒に、行政なりに声を上げていくということもあり得たかなと、今になって思います。

最後でよいのですが、私たち公運審に対して、もうちょっとこのようにしてほしいとか、こういうことができたのではないかとか、こういう声を上げてほしいとか、もっと公運審のことを知らせなさいとか、何でも結構ですので、団体活動の学びとつながりを続けるために、公民館の役割と書いてありますけど、

公運審の役割への要望があったら、お願いいたします。

【会場Ｈ】今日来て最初に思ったのは、若い人が多いなと思って。最初の委員長の挨拶、本当に感動しました。こうやって、公民館の歴史が次世代に引き継がれていくっていうのがどれほどうれしいことかと思いました。私も、保育室を使った学習をしてきた人間ですけど、新しいライフデザインですか、何かそういう方の話とか、一番力強く、通常どおり開いてほしかったっていうストレートな若者の意見ですね、これ、本当にその通りだというように、まずはすごく力が湧きました。

その上で、最初に委員長が言った、3つあるという、その最後の3番目というのが、まさしく今日お話しなさった中にあったのではないかと思います。主体的な学びとは何なのかということは、与えられたものじゃなくて、コロナ禍というのはまさしく、私たちが経験のない事態だったものだから、正解が分からなかった。だから、分からない状況で放っておかれたら、テレビとか新聞とか、そういったものに流されていく。で、それが正解だと思ってしまう。でも、何かそこに沸き上がる不安とか、不満とか、そういったものを解決しようと思ったら、実は自分 1 人ではできないということを、何となくみんな分かった。で、Zoom でもできない。もっと肉薄して、会って、一歩踏み出して、公民館に来て話すことで雑談の中から、自分たちの答えが分かる。自分の悩みの根源が分かる。で、私から、私たちにつながって、私たちはどういう道を選ぶっていう歴史を選択していく。まさしく「ユネスコ学習権宣言」の実践が、この公民館で、コロナ禍で、できたということを、私は本当にうれしく、私もそのように「公民館をまもる会」の仲間たちと、ずっと会い続けながら、ずっと自分の中で正解は何なのか、正解は私の心にある、教えられるものではない、私が見つけていくっていう。でも、私は私だけでなく、仲間の中で話し合うことによって、私たちとなって、学びとなって、戻っていけるというような。そういう意味では、この不安な状況の中で、安心してそれを考える場を提供した、公民館が提供した、だから一時中断が、閉館が問題だったというように思います。

これから二度とそのような事がないように、困難な状況になればなるほど、公民館を開け続け、私たちは民主主義を教えてもらうのでなく、つくり出せるんだと。今回のこの会の学びを、ぜひ答申に、力強く書いて、そしてまとめてくださったら、きっとそのことが、市役所とか、地域に広がっていくのではないかなと思って、みんなの希望になると思います。

本当によかったです。すみません。ちょっと感動した感想になりましたけど、ありがとうございました、みなさん。

【司会（長澤)】ありがとうございました。本当に私もそう思っています。大事なご意見、ありがとうございました。どうぞ、あとお一人ぐらいどうぞ。

【会場Ｉ】本日は貴重なお話を、パネリストのみなさんから伺ってありがとうございます。この 3 月まで国分寺市役所で、恋ヶ窪公民館で館長をしていまして、現在は東京農工大学の博士課程で公民館の研究をしています。公運審を毎月傍聴させていただいて、市民のみなさんの民意が高くて、学習権の保障というところに熱心に議論をされているところを、本当に頭が下がる思いで拝見させていただいています。

今日少し、パネリストのみなさんにお伺いしたいことは、今非常に感動的に、ほとんどまとめてくださった市民の方に続いて、大変恐縮ですけれども、行政のほうから情報発信をするに当たって、フェイスブックだとかツイッターだとか、ホームページ等で、これまでもしてきましたし、コロナの状況でも、国分寺でもそうでしたし、国立市さんもそうだと思うのですが、ここにいらっしゃる 6 つの団体のみなさん方が、コロナの前にどれぐらい、そういったデジタルなものを登録されていたり、活用されていたりしたのか。また今回のコロナ禍を経て、どれぐらい、やっぱり行政からの発信の重要性だとか、ご自分たちの団体の活動の発信といったところに力を入れてこられたのか。この 2 点、もし差し支えなければ、お一方ずつお伺いしたいなと思って、質問させていただきました。

【司会（長澤)】ありがとうございました。4 時までですので、そろそろ時間がないのですが、これでフロアからのご発言はよろしいでしょうか。末光委員長から一言どうぞ。

【末光（公運審）】パネリストの方々のお話、ありがとうございました。フロアからもすごい熱い意見をいただいて、公運審としても、公民館利用者としても、気を引き締めなきゃいけないなと思いました。

「学びとは何か」ということについて、今回は「つながり」の部分について、みなさんご発言いただいて、で、学びとは何かというところが、やっぱり課題として残るのかなという気持ちもあります。

自分は社会教育を学ぶ大学院生で、指導教員は牧野篤先生（東京大学教授）という方ですけど、その方の考えている学びは、平仮名の「まなび」と言っているのですけど、自分も変わって社会も変えていくプロセス、自分がいろいろな人と関わりながら、自分も変わっていきながら、その地域も変えていくっていう、そういった全体が変わっていく動的なプロセスとして、学びというものを考えていたりもして。

そこも踏まえると、やっぱり今の時間もそうかもしれないですけど、コロナ禍でいろんな困難があって、パネリストの方々も一人ひとり、考え方を変えていく、あるいは変えていこうとすることもあるのではないかなと思うんですけど、ちょっと他の方の質問も多いので、これは本当に感想ですが、それぞれコロナ禍を経験している最中にあって、自分はどう変わっていったのか、変わっていこうとしているのかということについて、それぞれのお話の際に、ちょっとお聞きしたいなと思いました。

【司会（長澤）】ありがとうございました。だいたい一分前後なのですけれど、パネラーの方へのたくさんの注文、質問がありました。公民館の役割や期待することについて、今のお話もございましたので、それぞれご自分でご判断いただいて、感想なり、あるいはみなさまのご質問に応えるという形で。では、長田さんから、1分前後でお願いします。

○登壇者からの最後のコメント

【長田】いろいろ質問いただきまして、十分応えられないんですけど。「公民館利用者連絡会」というのは、利用者が公民館を無料で、公平に、差別なく使えるように、気持ちよく使えるようにということでやっているのですね。その中には、「学び」というようなこともあるのですが、やっぱり人と出会って、自分にはないものを感じたり、あるいは自分では気がつかなかったこと、考えを聞かせてもらったりということは、自分の考えとか感じ方の幅が広くなりますよね。そうすると、それが自分の中で育っていくと思います。そのためにはやっぱり、相手も尊重しなきゃいけないし、かといって自分の意見も言わなきゃいけないし、ちょっと大変な部分っていうのはありますが、自分の中でね、そのエネルギーを使いますから、それがやっぱり一番大事かなと。積極的に活動すると、健康にもなるし、人に優しくすると免疫力もつくっていうのをちょっと聞きましたけど、大事かなというように思います。

今日はいろいろご意見いただきまして、ありがとうございました。

【片岡】いろいろ質問をいただいて、その中で、文教大学の G 君から質問があった、どうやって教訓を残していくかということですけれども。やっぱりこういうウイルスとか災害というのは、また再びいつかあると思います。それプラス、この公民館でいろいろやって、5年ぐらいになりますが、最近思うのは、自分の次の世代で活動を支えてくれる人たちが、どうやったら活動しやすいものを残せるかっていうのを、すごく考えています。そのように何か教訓を残すという面では、この 2 年間の運営ミーティングの議事録とか、こういうところで発表をお願いされて、まとめた資料とか、そのようなものをちゃんと 1 か所にまとめていきたいなと思って、そういうファイルを作っています。

これは、公民館のほうにもお願いしたいのですけれども、今いる職員さんがずっといるわけじゃなくて、入れ替わりがあるので、次の職員さんたちが、何かあったときに参照できるような、参考になるような、そのようなものを残していってほしいなって思います。

【池田】先ほど末光委員長から、「学び」とはというお話がありました。今日ここでいろいろなご意見を伺って、質問もたくさん受けて、その間、コロナ禍での「つながり」とは、「学び」とはということについ

て、一生懸命、私の頭の中で、「学び」が進んでいます。そのように、人と意見を交換しながら、自分の考えが変わっていく、あるいは、さらにどなたかが書かれたもの等も読んだり、そのような情報を得たりして、で、自分も変わっていく、そのようなことが「学び」なのかなということを考えています。

その中で、今、すごい疑問に思い、考えていて、自分の考え方が決まらないのが、今、何人かの方から、公民館、何があっても開けてほしいというお話がありました。私の中でコロナ禍というのは、もう今まで、60 何年の人生の中で初めてのことで、やはりすごく怖いです。今、イギリスだとか韓国だとかで、ウイズ・コロナに舵を切ったとか言いながら、またどんどん広がっていって、やはり命、とても大切ですし、亡くなる人が出てほしくない。病気になる人が出てほしくない。早くコロナ禍が終わってほしいという中で、やはり閉めるということも、必要な時ってあるのではないかと、今の私は考えています。でも、だからといって、すぐに閉めずに、ずっと開けていてほしいという考えも、「LABO☆くにスタ」の方の話を聞いていると、それが必要だというのは分かります。なので、その辺り、どう折り合いをつけてくか。やはりこれから、学習しながら、考えていくこと、それが「学び」なのかなというように思っています。

また、木島さんから、「つながり」についてのお話が出てきたと思いますが、やはり子ども食堂ということで、どんどん横に情報が行って、公民館にもチラシを置いて、つながっていくということで、一つの団体の中での「つながり」が、国立の中で、あるいはもっとさらに、外に、日本中にというように、ネットワークがどんどん広がっていくのってすごく大事だし、このようなコロナ禍みたいな中では、それが本当に命に関わってくるようなことになるのかなと思いました。

私も矢川で、フードサポートのお手伝いをしていますが、子ども食堂と一緒になって情報交換をしていると、ニーズが同じような方のところに届くのではないかなとか、そんなことも考えたりしました。

【原】本日はありがとうございました。お答えになるかどうか分からないのですが、今、実はコロナ禍での中で 20 代から 30 代の方の孤独を感じている方が、約 2 人に 1 人、50%いらっしゃると聞きましたが、高齢者はもっといます。そう考えると孤独ということが全ての原因で、いろんなことが起きてくると。やはり孤独を解消することが第一じゃないかということが、今叫ばれているようでございます。

考えると、『孤独は山になく、街にある』という言葉もございます。ですから、私たちは今後の生活、これからの活動の中で、いかに孤独を感じさせないかということに主眼を置いた行動をすることが大事かなと思いました。これは、一人ひとりに寄り添っていく、一人ひとりに焦点を当てていく、サーチライトを当てていく、取り残さないという活動をしていくことが大事だと。
大勢の中にいても、孤独を感じる人はいるわけですから、そのような事をどうやって解消していくかを考えていく活動をしていかなくてはならない。その事を私たちはこれから考えていく。これがやっぱり大事かなということを学んでいきました。

【久野】先ほどの質問で、市などからのデジタルの情報をどの程度得ていて、それがどうなったかということですが。私たちのグループのメンバーは、わりと以前からそのようなデジタル、オンラインの情報収集、情報共有、情報の告知とかにも利用して、多用しているほうだったのですけれども、やっぱりコロナ禍で、それがすごく進歩したというか、加速したなと思います。それは個人個人でやっているよりも、グループでやっていることで、お互いに影響して、それがすごく進んだなと感じます。

「ライフデザイン2018」でもそうですし、「喫茶わいがや」のほうでも、議事録をデジタルで作成するとか、そのような事もすごく一気に進んだ感じがして。私は「わいがや」の中ではちょっと、先ほど 20 代、30 代中心とおっしゃっていましたが、その世代をちょっと外れる年代になりますが、若い人たちの方法を、すごくそこから学んでいっています。

先ほどグループの横つながりの話を聞いたとき、私は今までそういうことは、ほとんど意識したことはなかったんですが、たくさんのグループ、いろんな世代の方がいて、こうやって一つの場でいろんなことを発信してくださったことで、この場だけですごく、たくさんの情報を知ることができたし、きっかけはコロナ禍という話の講座でしたが、このような機会は本当に、それこそ横つながりのよいきっかけであったなと思います。

あと、最後に、先ほど「なかなかいい会」さん、私、実はLINEも登録していて、いつも情報をいただいています。子ども食堂のほうは利用させていただいたことはないのですが、ハロウィンとか、子ども連れのイベント等は参加させていただいていて。すごく楽しくて、いいイベントで、ありがとうございます。「なかなかいい会」さんの LINE、いつも情報が、日本語と英語と両方流してくださっていて、本当にすごく丁寧なんですね。なので、LINE 登録されている方、すごくたくさん増えたらよいと思いますので、宣伝しておきます。ありがとうございます。

【山本】自分からは「学び」について、触れたいと思います。コロナは最初、皆さんすごく怖かったと思います。最近その恐怖って、薄れてきて、ちょっと意識が低い、マスクを外して外を歩いている人とか、たまにいらっしゃったりしますが。何で怖かったかって考えた時、知識がなかったからだと思うのです。では、その知識について、最初、ない状態から、どうすればある状態に行ったかというと、コロナ禍が始まる前、緊急事態宣言を発表する前って、結構、コロナについて話題が出ているにもかかわらず、すごく緩やかだったと思います。規制とかもそんなになくて。その時が一番動きやすかった。コロナ禍になって、緊急事態宣言が発令されてからの話をしても、やっぱり動きづらい。どうしようもない部分がすごく多いと思うのですが、緊急事態宣言が出る前のまだ動きやすい時に、コロナについての知識をより深めていくことが、今回こういった公民館の休館になる前に、より各々、知識を深めておいて、どのような対応を自分自身たちがすればよいのか、それを知っておけば、否定的な意見ではなくて、自分が先ほど言ったような、「ひらいていてほしい、あいていてほしい」といった意見も取り入れやすくなると思います。

なので、今後起きるとされている、恐らく起きるであろうと言われている南海トラフ地震についても、みなさんやっぱり知識があまりない、自分もちょっとないと思います。おのおのその知識を深めていただいて、またこういった機会を公民館で設けていただいて、それについて深めておくことで、今後より動きやすいのではないかと自分は思います。また、コロナみたいなことが起きるとは限らないですがやっぱり想定されていることに関しては、より知識を深めておくことが大事なのだなって思いました。

【針山】まず休館のときに、職員としてどんなことができたか、どんなことをやろうとしたかというのを振り返ると、やっぱり A さんからご指摘があったみたいに、できていない部分が多かったのではないかという反省点が、私自身にはすごくあります。先ほど話したみたいに、姿勢として、「共に泣き、共に悩み」っていうのを忘れずに、常に思っていなければいけないなというのを、改めて感じました。

ただ一方で、私たち職員、私以外の職員もいろいろ、担当事業を持って市民の方と関わりながら頑張って向き合ってはいますが、やはり一人ひとりの職員の持つ力っていうのは、決して大きくはないという部分も感じてはいて。だからこそ、こういった公運審の委員のみなさんや、市民のみなさん一人ひとりの声とか、力とか、そういったものがすごく後押しになっていただけるのではないかというようにも、感じています。

なので、これからもこのように一緒に考えたり、また、すごいピンチが来たりしたときに一緒になって、自分たちの学びとか、生活とか、そういったものを守っていこう、考えていこうというように、力を合わせていければなという事を、今回のパネルディスカッションで改めて感じました。

あと、「学び」と「つながり」ということですけど、私自身は「学びとつながりというのは地続き」になっていることなのではないかと思っています。やはり、つながりの中で、例えば、必ずしもよいことばかりではない、人とつながることで、違う人と出会うことで反発とか、意見の違いとか、そういった事も起こってくる。それは青年室でもいつも起こっている。でも、そういった中で話し合ったり、じゃあ、どのように折り合いをちょうどよくつけていけるか、そういった中で、それは人とのつながりだけじゃなくて、自分の意見を言ったり、改めて、自分がこんなことを思っていたのだというのを知る、そういったこともやはり「学び」の一つではないかと考えていて。それが常に起こる公民館という場所、それはすごく大事だし、守っていきたいし、つながり続けていかなければいけないと思っています。

先ほど D さんが、40 年ぐらい前に公民館でいろんな方と出会って、その後、少し違う生活に戻っていたけど、また再び出会って、「心遊会」という中で培われてきたというお話を伺って、すごく素敵だな、うれ

しいなというように思いました。そういったものの中の一部に、今、私たちが関わっていられるのだという事がすごくうれしいですし、そういったものを守っていくために、これからみんなで考えていきたいなというのを改めて感じています。

【司会（長澤）】あらためて、7 人のパネラーの方、本当にありがとうございました。もう時間を過ぎてしまいまして、申し訳ございません。

今回、「コロナ禍における学びとつながり　公民館の役割と期待すること」ということで、公民館と公運審の共同企画で、この学習会は開催されたのですけれども、パネラーのみなさんと会場のみなさんのご協力で、とてもよい会になったなと思います。まさにこの会自身が「学びとつながり」につながっていく、そのようなきっかけになったのではないか、と思います。

一つだけ。『くにたち公民館だより』には、ユネスコの「学習権宣言」が毎回、下に書いてあるのですね。12 月号には「学習権とは、創造する権利であり、自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利であり」とあります。私は今回の公運審答申、来年に向けて今、頑張っているところですけれど、こうやって市民の方たちといろいろ議論しながら、この歴史をつづっていく、コロナ禍という未曽有のこの経験を踏まえて、それをくぐり抜けた後で出てくる答申という意味では、まさに歴史をつづっていくとても貴重な機会になっていくのではないか。それは公運審だけではなくて、みなさんと一緒に、市民の方たちと一緒につくっていくという、そのような視点もすごく大事なのではないか、と思います。

まだまだ残された課題もたくさんあるかと思いますが、とてもよい学習会ができたのではないかなと思っております。本当にありがとうございました。では、最後に髙野さんにお返しします。

【司会（髙野）】本日は長い時間、最後までご参加いただきましてありがとうございました。そして、登壇者のみなさん、大変貴重なご意見、ご経験を語っていただき、ありがとうございました。

参加者のみなさまに、今回の「コロナ禍における学びとつながり」についての気づきだったり、発見だったりを、ぜひ最後にアンケートへご記入をお願いしたいと思っております。先ほども申しましたが、作成中の答申のほうへ、参考資料としていただきたいと考えており、ぜひご協力をお願いいたします。

それでは、これにて本会を閉会とさせていただきたいと思います。今日は本当にご参加ありがとうございました。

―― 了 ――

第 33 期国立市公民館運営審議会委員と石田進館長、針山和佳菜主事

２．学習会を終えて

⑴　登壇者　～学習会を終えての思い～

①　長田利信さん（公民館利用連絡会）

学習会でみなさんの発表を聞いて、コロナ禍という困難な状況の中でも知恵を出し合い、工夫して学習を継続していく姿勢に感動しました。また一人だけでは無理でも仲間がいればエネルギーを出せる、頑張れるというようなものを感じました。

困難な状況の中で何がそう活動させたのか、仲間のためにエネルギーが出せるのか、などその意識感覚、考えなど活動の本能というのかそれを学びの手本として、文章などの形として残せることができたらと思います。

社会があって個人があるのではなく、個人があって社会があるのです。個人が豊かにならないと社会は豊かになりません。個人の学習(何を学習するかによりますが)こそ、より良い社会の原点だと思います。
豊かな個人となるための学びを公民館での交流で培うことができれば、面白いと思います。基本的に小さいときからの教育に関わっていくと思いますが……。

②片岡優さん（喫茶わいがや　スタッフ）

パンデミック。それは、今を生きる私たちが、経験したことのない試練でした。休業・閉鎖、外出自粛、ソーシャルディスタンス……“密”な付き合いを拠りどころにしてきた私たちにとって、全てのことが今まで通りに行きませんでした。何を諦め、何を活かすのか。日々厳しい判断の連続でした。

しかしそうした中で、知恵を合わせ、工夫しながら活動する方法を徐々に見出すこともできました。漫然と続けていた活動の意味を、改めて問い直す機会にもなりました。人と人との間に距離を取らなければならない社会で、居場所を求めてきた人との、新たな出会いも有りました。困難は、形を変えてまた繰り返されるでしょう。

その時のために、私たちができることは、あの時どのように思い、どのように動いたのか、様々な方法で伝えていくことです。それが、この時代に生きた者に与えられた一つの役割なのだと思います。この場を受け継ぐ次代の方のために、私たちの経験が、少しでも参考になれば幸いです。

③池田祐子さん（KUNIFA 日本語サポート）

パネリストを引き受けた時は不安でしたが、さまざまな分野で活動なさっているサークルの方々と意見交換していくなかで、コロナ禍のような非常時においても学び続けることの大変さや大切さ、人は年齢や立場に関係なくつながりの中で成長していくことを再確認する機会となった貴重な学習会となりました。
今まで KUNIFA の活動について日本語学習者とボランティア会員だけの活動としてしかとらえていませんでした。しかし、コロナのような前代未聞の事態に陥ったときサークル間の情報交換で活動方法のヒントが得られるなど公民館という場を共有するサークル同士がつながっていくことで、互いの学びや活動の可能性が広がるということにも気づかされました。

そして、市民の自由な学びを上から引っ張っていくのではなく、土台から支えてくれている国立市公民館の姿勢はずっと変わらないでと、願っています。

④久野千鶴さん（ライフデザイン 2018）

きちんと集まって振り返ってみる会を開催することのできる公民館と公民館運営審議会が凄いなと思いました。私たちのような子育て世代の団体は他にはなく、参加できたのにはとても意味があると感じました。多世代にわたる集まりでは、すぐにお互いの全てに共感できたりはしないのですが、新たな発見があり、学びによって考え方を変える可能性が高いと感じました。

学習会のおかげで「ライフデザイン 2018」は私たちだけの力ではなく、支えてくださっている方がたくさんいて活動している」ということが改めて分かりました。今すぐではありませんが、子育てが一段落したら、当たり前に享受している恩恵を与える側に関わり、役割を担いたいと思えました。

今回の学習会参加をきっかけにメンバーが現時点や過去の自分自身を振り返って、それをグループ内で共有することができ、その後、グループ活動や毎日の生活の中で夢や目標を見つけてそれぞれが自分のペースで歩み始めています。「ライフデザイン2018」ではそれぞれが調べたり、学んだりした事を発表する機会がありますが、気心知れたメンバーだからこそ「こんなこと人前でできるかな？」「こんなこと話してもよいかな？」と思うことをアウトプットすることができています。これからもそれぞれのメンバーが輝き、自分の人生を生きていくための大切な場であればと思います。

⑤原　秀雄さん（心遊会）　「当日の報告が全ての思い」というご回答があり、省略させていただいた。

⑥山本貫人さん（LABO☆くにスタ）

社会教育学習会にて「LABO☆くにスタ」のコロナ禍における問題点として、お弁当が無くなったことにより交流の場が減少、その結果コミュニケーションの機会が失われ、居場所としての側面が薄れたという事を挙げました。また、あの場ではあまり触れることができていませんでしたが、接触によるコロナ感染を避けるためか、学習者が大幅に減少していました。

学習会から 5 ヶ月を経て現在、LABO では非常に学習者が増え、そしてコミュニケーションの機会も増加し、かなり活性化しています。

具体的には、市報による呼びかけや、学習者が友人を連れてきてくれることなどにより人数が大幅に増加。また、机の配置を他の学習者支援者ペアと向き合うような形に変え交流の機会が増えました。そして、お弁当の件も進展があり、まだコロナ禍を抜けきっていないため、一緒に食べることはできませんがお持ち帰りという形で復活しました。今後は新型コロナの動向を見て一緒に食べる機会を設けることができることを期待しています。

⑦針山和佳菜さん（公民館職員）

日々の業務と懸命に向き合っていると、なかなかコロナ禍が始まった当初や公民館閉館時の混乱・戸惑いを振り返る機会がなく過ぎていってしまいます。今回、改めて市民のみなさんと一緒に社会教育学習会というかたちで考えることができ本当に良かったと感じています。

コロナ禍は、これまで私たちが大切にしてきたこと――人が出会い、つながり、学び合う――を根底から揺るがすものでした。講座や学習の時間だけではなく、同じ空間にいて、お喋りをして、時には喧嘩もして……。そんな「余白の時間」も含め公民館という場で広がるはずだった世界が閉ざされたとき、職員としてまたひとりの市民として何ができるのでしょう。まだまだ模索中ではありますが、学習会でお話したとおり、まず「共に泣き、共に生きる」ことを寄る辺に進んでいくほかないのではないかと思います。

⑵　参加者アンケート

〇社会教育学習会のご感想など

・委員長の設問、問題意識とつなげてまとめられたらもっとよかった。
・公運審について理解する機会などあればと思いました。
・設問について答えるのみならず、社会教育をめぐる状況についても共有していただきたいと思います。例えば、社会教育士の問題点など。
・国立市だけがなぜ 1 回の休館後、開館し続けられたのか。ここはぜひ、国立市民のみなさんの手で検証してほしい。
・公民館が場の提供に限らず、人とのつながりを提供しているのだと改めて感じた。今、大学生だが、2年間大学に行けず、孤独だなと思う。こういう大学生をつなぐ活動、かつて小学生のときに公民館を利用していた世代を呼び戻す活動もしてほしいと思った。
・くにたちの公民館の団体さんのお話を聞いて、感動しました。公民館活動は自分の学びだけでなく、まちとしての財産だと思っています。60 歳になってから、シルバー学習室に参加したいと心遊会の話で元気が出ました。

・公民館の他の活動者の意見が聞けて良かった。
・各団体が各々の課題を抱えながら、参加メンバーのより良い状況を目指して努力されていらっしゃる様子がわかって良かった。人と人とのつながりの大切さを感じた。
・とても良い会でした。本日のパネリストの話をまとめて、公運審答申にしていくのは賛成です。近年経験のないコロナパンデミック。ＴＶや新聞だけの情報だけでは、不安は払拭されません。やはり集まって話すことにより、自分の不安のありどころを知り、他者の悩みもわかり、共有し、落ち着いて希望をもって危機を乗り越えていけると思います。「安心して今起きている状況を知り、どう行動していくかを選択できる」そういう場が公民館であり、社会教育であり、学ぶ権利であり、生きる権利であり、平和を守り人権に基づく地域づくりにつながります。
・非常に勉強になり、かつ、同じ地域住民として心強く勇気をいただきました。
・パネラーの方たちのお話はとても良かったと思います。それぞれのサークル自慢にならず悩みや課題を率直にはなされたことには感動しました。良い企画だったと思います。
・様々な活動により様々な希望があり、多種多様な対応に公民館に依存するだけではなく、特徴を活かしながら活動を継続するためには各団体各グループが独自のアイデアを出し、そこに公民館の協力を得ていく。自分たちの方向性をきっちり考えておくべきだと感じた。
・パネリストの方たちの経験に基づいたお話は説得力があり、とても深く考えさせられました。コロナ禍をきっかけに新しい公民館の姿が見えてきたように思いました。
・公民館で活動している方のお話を聞きたかった。どのような活動をしているのかを知れて良かった。人との交流が大事だというのがよく分かった。
・このような会が開催されたことがとてもすばらしいと思いました。公運審について知る一助となりました。様々な意見を聞くことで、思いもつかなかった可能性を感じました。私の中ではコロナ禍での公民館は攻めた活動をしていたと感じていたのですが、このようなバックグラウンドがあるからなのかと得心しました。
・公民館の居場所の機能を知りました。市内には居場所が他にもあることも感じました。
・それぞれのパネラーから公民館は市民の居場所として仲間づくりとして大事な場であるとの発言だったと思う。緊急事態宣言により、公民館は公運審に断りもなしに閉館したと聞き及んでいる。過去を振り返り、ぜひそのことを答申に生かして欲しいと思って期待しています。
・こんなに多くの学びのグループがあり過去実践のない分野で様々な研鑽を続け実践されていることに驚き、この会に参加して良かったです。文教都市の声にあまり感ぜずにすごしてこの年(86 歳)になって市の色々なことを学び知り感謝しています。
・パネリストが多い印象でしたが、年齢構成も活動領域も異なっていて面白いお話が伺えました。貴重な機会をありがとうございました。
・とても良い会でした。個人的には針山さんの日常(平時)の大切さということ、私も別の場面で感じていたことなので同じ思いの方がいらっしゃるのが嬉しかったです。末光さんの最初のコメント(他の方からもあったかも)ですが「変わる」ことも大切かもしれませんが、これだけ世の中が激変している中で「変わらず大切にすること(もの)」も大切なのでは？と思いました。平時の人間関係の大切さは、ずっと前から変わらない大切なことだと思います。「ラボ☆くにスタ」の山本さんの「知らないからコワイ」というの、まさにそうだと思います。知識を深めることの大切さ、それを行うための公民館、ますます大切さを感じました。長澤さんの最後のコメント。感動的でした！
・コロナ禍での出来事がある中で、人と人とのつながりや他人への協力を学びました。この発表会での話は、今後の生活にいかせれば良いなと思いました。今日はありがとうございました。

〇公民館運営審議会へのご意見・ご要望

・またこういう場を作ってほしいです。
・中高年世代のしょうがいしゃの集いがあれば嬉しいです。もっと色々な講座が出来ると(30～40 代でも居心地の良いグループ)ありがたいです。
・たいへんよかったです！公運審頑張ってください！

・公運審は民主主義を学び、つくり出す場であると思います。「私」はどう考えるかをあきらめず、みんなでひとつの結論にいたるまで考え話し合うことをあきらめないこと、そういう議論を続けてほしい。
・今後、子どもと共に利用してみようと思います。
・市内、市外にかかわらず大きな目でまわりの市民活動を見廻し、よいことはどんどん取り入れてもらいたい。
・素晴らしい企画でした。ありがとうございました！
・どうぞ更に前進、人々とのつながり喜びを大きく楽しく、市民のために頑張ってください。

⑶　企画委員

○幸島裕子（公民館運営審議会委員）

学習会企画時、コロナ禍により全員と事前の顔合わせによる打ち合わせができなかったことや、職員を含めて登壇者 7 名を予定していため、当日の時間配分等が気になっていました。しかし、度重なる打合せにより、内容がよくなっていくことが実感できたのは、委員や職員の的確なアドバイスがあったからだと思います。

当日は、公運審委員長によるこの間の活動報告と学習会の趣旨説明は導入部分としてわかりやすく、また、学習会メンバー作成の資料も補助説明として参考になったこと、登壇者が報告する第一部の進行もポイントを押さえ自然体だったこと等がよかったと感じています。最も、コロナ禍の活動状況や悩み等を登壇者が「生の声」として率直に語っていただけたことが何よりも収穫となりました。

第二部のパネルディスカッションでは、コーディネーターとしての学識委員のスムーズな進行、そこから生まれる言葉、登壇者やフロアから生まれる数々の言葉に胸が熱くなり、公民館の役割等を改めて考えさせられました。個人的には、職員の言葉「“学び”と“つながり”は地続き」に納得していますが、テーマ「コロナ禍の学びとつながり」の“学び”について、もう少し掘り下げることができればよかったと感じています。「大人の学び」や「主権者として生きる」ことを深く考える機会としては不充分であったと反省しつつ、社会教育の本質でもある“学び”については、引き続き自分なりに考えていきたいです。

○高野　宏（公民館運営審議会委員）

私はパネリストのみなさんがコロナ禍での活動における葛藤、悩みについて非常に冷静に振り返っていらっしゃったことが印象的でした。公民館が休館になった時、その後開館した後も、できなくなったこと、失ったことはそれぞれあったのでしょうが、それでもそこから得た学び、それまで得てきた学びにそれぞれ気づくことができた、という実感を話の中から受け取りました。私はそこから、「未曾有の危機に何もできない」、ということは無いのだと思いました。何ができて、何ができないか、それを冷静に判断し、何らかのコミュニケーションを取りながら物事を前に進めていく。それは普段からの学びを通した信頼関係によって成り立つものなのではないかと、この度のディスカッションを聴きながら感じたのでした。課題としては、実は団体同士のつながりが薄いということでしょうか。さらに、異なるジャンルの学びがどう結びつき、危機に際してどのような反応につながっていくのか、今後に期待していきたいと思います。

○野口泰寛（公民館運営審議会委員）

開催すら危惧される状況の中、「全て自前、地元の市民職員、公運審委員、公民館内開催」が決定し、今回の内容となりました。

会場設営担当の者として、会場が埋まり、パネラーが真剣に発表、会場全員が学びの学習。

真剣に考え、手を挙げて発言する。『公民館の存在意義ここに有り』と感じたのは私だけでしょうか？

国立公民館の戦後の始まりもこのような「キッカケ」だったかもと。

70 歳高齢者の一員として、オンライン設備は当然の事、講座修了後と AI 設備で自由に映像を見ること。講座修了後も今までにまして、『言葉』で伝え合うことをフレイル予防を掲げる市公民館に求め、我々も協力していく事を心に念じました。

2021 社会教育学習会

コロナ禍における学びとつながり
～公民館の役割と期待すること～
パネルディスカッション

新型コロナ感染拡大により、私たちは経験がないような不自由な生活を過ごすことになりました。特に昨春は初の緊急事態宣言により、公民館を始めとする社会教育施設の多くが休館となりました。国立市公民館も休館となり、開館後も利用制限を受け、私たちは「当たり前の生活」がなくなる不安や焦りを感じました。多くの人が、その中でも試行錯誤を重ね、学び、集うために何ができるのかを考え、活動を続けてきたのではないでしょうか。

今回の社会教育学習会では、公民館を利用する各団体、公民館職員からコロナ禍の活動や仕事を通じて見えてきたこと、課題、思いなどをお話ししていただきます。また、公民館運営審議会からの報告等もふまえて、社会教育行政や公民館は、私たちの権利としての学びをどう保障していくことが大切なのか、また、「大人の学び」や「主権者として生きる」とは何かをみなさんとともに考える機会とします。

日　　時　　2021 年 12 月 18 日（土）　13 時 30 分～16 時 00 分
会　　場　　国立市公民館　地下ホール（国立市中 1-15-1）
報　　告　　末光　翔（公民館運営審議会委員長）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　長澤成次（放送大学千葉学習センター・公民館運営審議会委員）
パネリスト　①公民館利用者連絡会（長田利信さん）
②喫茶わいがや（片岡　優さん）
③KUNIFA 日本語サポート（池田祐子さん）
④心遊会（原　秀雄さん）
⑤ライフデザイン 2018（久野千鶴さん）
⑥中高生のための学習支援 LABO☆くにスタ（山本貫人さん）
⑦国立市公民館職員（針山和佳菜さん）
定　　員　　40 名（先着順）
申込方法　　11 月 16 日（火）午前９時からお電話でお申し込みください。
※オンライン受講可能。お問合せください。
国立市公民館（042-572-5141）
主　　催　　国立市公民館・公民館運営審議会（共同企画）

※公民館運営審議会とは
公民館長の諮問機関として、「公民館における各種事業の企画実施につき、調査審議する」役割を担う。国立市公民館条例第５条では公民館運営審議会を置くことが定められており、委員の定数は 15 名とされている。（国立市ホームページより）
※社会教育学習会とは
公民館運営審議会と公民館が共催で企画実施する社会教育・生涯学習などについて学ぶ学習会。

第 33 期公民館運営審議会　社会教育学習会・パネルディスカッション

2021 年 12 月 18 日(土)

コロナ禍における学びとつながり
～公民館の役割と期待すること～

＜タイムスケジュール＞　13 時 30 分開始
◯ 開会・はじめに:20 分
◯「コロナ禍で私たちの学びは」(7 人のパネリストの事例報告):50 分
　　―休憩―　10 分
◯「各団体のお話から見えてきたこと」(進行役から・フロアからパネリストへの質問):60 分
◯ パネリストからひとこと、まとめ:10 分
16 時終了予定(アンケートへのご協力よろしくお願いいたします)

はじめに
第 33 期公民館運営審議会の活動報告／今回の学習会の趣旨説明・・・報告　(末光委員)

※公民館運営審議会とは
公民館長の諮問機関として、「公民館における各種事業の企画実施につき、調査審議する」役割を担う。国立市公民館条 例第 5 条では公民館の民主的運営を図るため、公民館運営審議会を置くことが定められており、委員の定数は 15 名とされ ている。

わたしたち第 33 期公民館運営審議会では、館長の諮問を受け、「新型コロナウイルス感染拡大時において、教育機関としての公民館事業はどのようであるべきか」、月に一回の定例会のほか、15 名の委員がアンケート班や記録班などに分かれ、意見交換や公民館休館時の記録の収集・検証に取り組んでいます。これまでの話し合いでは、それぞれの委員が関わるサークルや市民団体の立場から、公民館休館時をふりかえり、当時さまざまな形で市民同士の支え合いが行われていたことを確認してきました。また、今後検証していきたいこと・議論していきたいこととして以下のような課題が出てきています。

・高齢の方、しょうがいのある方、日本語を母語としない方々など、学びに参加しづらい方々の学び・活動を、それぞれの立場からどのように支えていくことができるのか？

・公民館は、国立で暮らす市民の誰もが何気なく訪れ、安心して話ができる場でもあるのでは。地域の安心の場としての公民館があることを広く知ってもらうには？

・一人ひとりが主体的に学び、生きることを、公民館がどのように支えることができるのか？　例えば休館時、公民館の立場から何ができたか？

今回の社会教育学習会では、公民館を利用する各団体、公民館職員からコロナ禍の活動や仕事を通じて見えてきたこと、課題、思いなどをお話ししていただき、コロナ禍の休館時をふりかえる（記録し、検証し、広く市民同士で考える）機会にしたいと思います。それぞれのパネリストの 方々が大事にしている「学び」や「つながり」をお聞きし、一人ひとりが「主権者として生きる」とは何か、「大人の学び」とは何か、それらを社会教育行政や公民館がどのようにして支えることができるのか、コロナ禍を通じて改めてみなさんと見直していく機会にできればと思います。

第一部

事例報告「コロナ禍での私たちの学びは」・・・・・・・進行（高野委員）

① パネリスト紹介（各団体に事前に配布しましたアンケート内容を記載しております。）

A【公民館利用者連絡会：長田利信】50年前、公民館の先着順の利用申込みは早朝から行列ができ大変だったので、どのサークルも安定的 に活動できるようみんなで集まって部屋の利用を調整しようとしたのが始まり。自主的に集まり互いに話し合い、譲り合って公民館を利用することでスムーズに活動が続けられるためです。公利連加入サークルの中から選出された世話人が中心に運営しています。活動内容は、①公民館主催の調整会の協力②公民館での交流会への他団体との参加③世話人会などで公民館利用に際してのお知らせや問題点を話し合い、公民館へ改善をお願いしている。

B【喫茶わいがや（障害をこえてともに自立する会）：片岡優】公民館の1階で喫茶店を営業しています。10～30 代を中心としたスタッフと公民館が協働で運営し、市のしょうがいしゃ青年教室に登録している障害当事者も実習生店員として参画しています。

C【KUNIFA 日本語サポート：池田祐子】地域で日本語を学ぶ人たちの相手となり、学習者が生きた日本語を学ぶためのサポートをするボランティアグループである。「生活のための日本語講座」の後、及び土曜日午前に、日本語の実践会話の練習、日本語検定試験の準備など学習者の必要に応じて対応している。年に一度の学習者による「日本語スピーチの会」を行っている。会員の研修する機会として「日本語の勉強会」、や日本語教育に関する講演会を設けている。団体として協力している KUNIBO（くにたち地域外国人のための防災連絡会）では公民館との共催で「にほんごサロン」を開催し交流の機会を設けている。

D【心遊会：原秀雄】公民館の講座である「シルバー学習室」1期が1980年代にスタート。2022年度は 43 期生が学習している。公民館主宰の講座の中でも、42 年間の伝統ある講座のひとつである。心遊会は、シルバー学習室の OB・OG が結成した親睦団体で、第 7 期卒業生の時（1986年）に発足した。サークル活動は、前年の1985年から8サークルが開始する。結成して35年目の佳節。現在（2021 年）のサークル活動は、10 サークル。最低月 1 回、多いサークルは、週 1 回の活動を実施している。会員数は、今年175名在籍。

E【ライフデザイン 2018：久野千鶴】公民館で毎年開催されている講座「女性のライフデザイン学」の、2018 年度受講メンバーを中心に集まったグループです。講座終了後から自主活動に移行し、公民館の保育室に支えられながら現在も週 1 回の活動を続けています。メンバーが関心のあるテーマについて語り合う会のほか、それぞれの得意分野を生かした「絵本づくり講座」「マナー講座」なども開催。時にはゲストをお招きして「介護の体験を聞く会」「ドリームマップを作る会」なども行い、今後の人生について考える機会も作りました。2019 年 3 月には公民館でキッズスペースを設けた公開講座を企画・開催。母・妻として、そしてひとりの女性として、自分とじっくり向き合い、仲間から刺激を受けながら自分の人生について考えることができる、とても有意義な時間となっています。

F【中高生のための学習視線「LABO☆くにスタ」：山本貫人】主な活動としては、中高生が学校で分からなかった問題等のサポート、学校生活の中での不安の相談などを行っている。また、年に数回季節のイベントを行っており、今年は 12 月 22 日にクリスマス会を予定している。

G【公民館職員：針山和佳菜】社会教育主事。主な担当事業：《通年事業》しょうがいしゃ青年教室、中高生のための学習支援 LABO☆くにスタ、身体表現「からだであそぼう」《そのほか事業》地域資料（アーカイブズ）、地域史、一橋大学連携講座、平和・近現代史、公民館図書室など。

② コロナ禍での活動・悩み

	コロナ禍での活動制限（一例）	代替交流手段	活動の悩み	その他
A.公利連	限定的な協力体制に	メール、電話	年度の引き継ぎ	公利連だよりで情報発信を大切に
B.わいがや	2 度の営業休止期間	SNS など多数	非対面コミュニケーション	2 つのジレンマ
C.KUNIFA	日本語サポートできない期間があった	オンラインビデオ	会員のモチベーション下降への不安	
D.心遊会	書面のみ総会や一方通行型の講演へ変更	メール・電話	親睦を深める企画ができない	新規卒業生が馴染めず
E.ライフデザイン	リアル・オンライン交流を併用	オンラインビデオ	コロナ以前から LINE で交流しており大きな支障無し	文集をデータ化
F.LABO	食事を中止	LINE	コミュニケーションの機会減少	

③コロナ禍において公民館にして欲しかった事（今後して欲しい事も含む）

A.公利連	各部屋に消毒剤など設置してもらえると良い
B.わいがや	感染防止への意識に不安がありもう少し徹底して欲しかった
C.KUNIFA	Zoom の使い方などの講習会開催
D.心遊会	休館時に印刷機を使えるようにして欲しかった（広報誌刷れず）
E.ライフデザイン	ホームページや公民館だよりでおすすめの本など発信して欲しい
F.LABO	通常通りの運営であって欲しかった

第二部パネル・フロアディスカッション（参加者からの質疑応答）

「事例報告・お話から見えてきたこと」・・・・・・・進行（長澤委員）

※今回のパネルディスカッションは、パネリストの発表を中心にしながらも参加された方の質問等を通じて意見交流を図る機会にしたいと考えています。

進行：長澤成次さん

〈プロフィール〉

1951 年東京都北区生まれ。千葉大学教育学部教授、千葉大学理事、社会教育推進全国協議会委員長、「月刊社会教育」編集長、日本社会教育学会会長などを歴任。現在、放送大学千葉学習センター所長、千葉大学名誉教授。著書に『公民館はだれのものⅡ住民の生涯にわたる学習権保障を求めて』（自治体研究社、2019 年）、『公民館はだれのもの住民の学びを通して自治を築く公共空間』（自治体研究社、2016 年）、編著に『公民館で学ぶシリーズⅠ～Ⅴ』（国土社、1998 年～2018 年）などがある。

社会教育学習会アンケート

コロナ禍における学びとつながり
～公民館の役割と期待すること～

本日は、社会教育学習会「コロナ禍における学びとつながり～公民館の役割と期待すること～」にご参加いただきありがとうございました。
今後の公民館及び公民館運営審議会活動に役立てたいと思いますので、アンケートにご記入願います。該当する数字に〇で囲んでください。
また、本日の学習会の感想・要望などをお書きください。

※ご記入いただいた内容を今期の公民館運営審議会答申に反映させていただく場合があります。
その場合は担当者による編集を一部させていただくこともありますがご了承ください。

◎この催しを何で知りましたか。
１公民館だより　２チラシ　３友人・知人
４ウエブサイト　５その他（　　）

◎公民館運営審議会を知っていますか
１知っている　２知らなかった
３公民館運営審議会委員である
４公民館運営審議会委員だった

◎今回の学習会を受講した感想をお書きください。

◎公民館運営審議会へのご意見・ご要望などがありましたらお書きください。

ありがとうございました　国立市公民館・国立市公民館運営審議会

4. 社会教育学習会のねらいと成果

(1) 社会教育学習会とは

社会教育学習会（以下、学習会）とは、社会教育について学ぶ公民館事業として、公運審の委員のみならず市民も参加できる学習会として実施されてきた。2012 年度からは公運審委員が企画に参画して、公民館運営審議会と公民館の共同企画事業として実施されてきた。

2020 年 11 月から任期が始まった第 33 期公民館運営審議会（以下、公運審）においては、初回に各委員の役割分担を決めることになり、学習会のメンバーとして幸島裕子、高野宏、野口泰寛 3 名が立候補にて選出、任期中の学習会の企画・実施を担当することになった。

実際の企画の話し合いが始まったのは、今期公運審が始まった約半年後の 2021 年 6 月頃からである。話し合いには、前述のメンバー3 名と館長、担当職員が集まった。今期は、公民館長から「新型コロナウイルス感染拡大時における教育機関としての公民館事業について」の諮問がその前月に出された。諮問の内容に関連した学習会を企画することが求められていると想像はできるが、どのような内容にするのか、白紙の状態からのスタートとなった。初回の話し合いでは、職員から直近に実施した過去の学習会の内容を「公民館だより」等から紹介された。

直近では、2019 年の前公運審担当者による企画に「国立を見える化する 第 1 回～データで知る地域～」がある。また、2018 年には、「公民館のウイングを拡げる ～社会変化と住民自治～」と題して実施している。前者の学習会では、国立市の現状、市民のくらしにかかわる統計やデータ等から地域の理解を深める学習会として実施された。後者の学習会では、公民館等の社会教育施設を教育委員会から自治体の首長部局に移管する問題等、中央教育審議会議論の背景や公民館をめぐる環境等についての内容であった。いずれも、国立市の状況、公民館をめぐる問題を「現状（いま）を知る」こと、「課題を知る」ことを各専門家から学ぶ内容であった。

近年の社会教育学習会例（講師敬称略）

日程	テーマ	講師等
2019 年 12 月 5 日	国立を見える化する ～データで知る地域～	中西英一郎（多摩信用金庫経営戦略室地域経済研究所）、猪飼修平（一橋大学）
2018 年 8 月 9 日	公民館のウイングを拡げる ～社会変化と住民自治～	牧野篤（東京大学）

(2) 企画内容案ができるまで

以下では、今回の学習会が実施に至った企画の経緯について、備忘として記録しておきたい。

① 学習会のイメージの共有～6 か月前～

2021 年 6 月頃、企画内容が漠然としている当初の打ち合わせでは、公運審学識委員から紹介があった映画『公民館ものがたり』を学習会の導入部分として見るのはどうか、公民館職員の OB・OG からの話しを聞くのはどうか等、アイデアを自由に話してはいたものの、どのような学習会を企画するのがよいのか担当者として悩んでいた。

映画『公民館ものがたり』は、昭和 30 年代に疫病が流行した際、公民館においてその対策を公民館主事と保健所職員が協力し、対策を講じたり、感染予防のための学習会を市民向けに実施したりと、コロナ禍の公民館に通じるものがあるのではないかという発想であった。また、公民館職員のＯＢ・ＯＧからの話しを聞くというのは、コロナ禍という困難な状況下で公民館はどうあるべきなのか、国立市公民館に携わってきた職員としての思いや、社会教育に関わった長年の経験を率直に語ってほしいという願いからだ。

それでも、具体的な企画内容が決まらない中、過去にどのような学習会が企画されてきたのかを「公民館

だより」等から更に調べることにした。過去の学習会を見ていくうちに、時代背景をもとにテーマや内容を選択していく難しさ、公民館において社会教育を市民とともに学ぶという、中核であり直球的な事業をどうつくることができるのか。さらに、経験のないコロナ禍との関連から企画する学習会に不安を覚えたが、調べるうちに方向性が見えてきたのは、先述の「現状（いま）を知る」、「課題を知る」ことに軸を置くことが決まった頃からだ。コロナ禍における公民館の役割について考える学習会のイメージが担当者間で共有できたこと、今期公運審学識の立場の委員に当日の進行に関する協力が得られる体制が比較的早く確定できたことが大きい。

② 学習権から遠ざけられている人に焦点化する視点

また、他の公運審学識の立場の委員との話し合いから、学習権（＝生存権）から遠ざけられている人、例えば、高齢者、難病者（コロナ感染者）、しょうがいしゃ、外国籍市民、生活困窮者等への学びの機会や対応について、コロナ禍の公民館は何をしなければならなかったのかを考える機会にしたいと次第に思うようになっていった。それらの話し合いから、登壇者の案や学習会内容の輪郭、何を大切にしなければならないのか等、自分の中で企画への“思い”が温まっていく感覚となり、不安から少しずつ期待に変わっていった。

③ 「生の声を聴くこと」をスタートラインに～5 か月前～

具体的な内容を企画するにあたり、開催時期を約半年後の 12 月中旬、土曜日の午後を候補に日程を決めた。広報として「公民館だより」11 月 5 日号に掲載すること、作成したチラシを配布する計画も必要だということが見えてきた。学習会の内容については、諮問「新型コロナウイルス感染拡大時における教育機関としての公民館事業について」との関連から、その内容を学習権（＝生存権）から遠ざけられている人に焦点をあてることを中心に、当事者や当事者を支える団体がコロナ禍でどのように過ごし、学び、つながりを保とうとしたのか。その「生の声を聴くこと」をスタートラインとし、大切にしたいと考えた。コロナ感染拡大による公民館休館時やその後の学びや活動から公民館の役割について考える機会とし、答申にその内容を反映させていけたらと担当者、職員等で話し合った。

学習会の冒頭の内容はどうするのか、シンポジウムにするのか、パネルディスカッションにするのか、登壇者をどう選ぶのか、まとめ方はどうするのが等、ひとつひとつ相談し、話し合っていった。

学習会担当者の話し合いは月 1 回程度実施されたが、職員及び館長は毎回、また、状況に応じて他の公運審委員が話し合いに参加し、アドバイスをもらえたことがとてもありがたかった。

④ 学習会の具体的内容の企画～3～4 か月前～

6 月頃から始まった学習会の内容は、約 3 か月後に大枠が決まり、テーマも「コロナ禍における学びとつながり～公民館の役割と期待すること～」となった。話し合いを進める中、職員の仲介で登壇候補者が決まった。

社会教育学習会記録にあるように、登壇候補者は、「公民館利用連絡者」、「LABO☆くにスタ（若者）」、「KUNIFA 日本語サポート（外国人等）」、「喫茶わいがや」スタッフ（しょうがいしゃ）、「心遊会」（高齢者）、「ライフデザイン 2018」（女性講座修了者）（女性）、そして公民館職員である。

コロナ感染拡大時、公民館を利用できなかった、制限があり影響を受けた高齢者、しょうがいしゃ、外国人等の日本語を母語としない人、子育て中の母親等、学習に参加しづらい人びとの学びや活動がどのような状態であったのか、私たちはそのことが見えていたのか。未知のウイルスに関する情報に振り回され、自分のことで精一杯ではなかっただろうか。公共の場である公民館が休館になってしまった時、日常が日常でなくなった時、この学習会で何を語ってもらうことができるのか、公民館はどのような役割を期待されているのか等、登壇候補者との関連から担当者を含むメンバーでの話し合いはより具体的な内容になっていった。

登壇者として職員も含めて 7 名を候補にしていたため、報告の時間配分が気になったが、ひとまず、パネルディスカッション形式とし、①団体紹介・活動報告、②コロナ禍の公民館休館中は活動をどうしていたのか、悩みは、③公民館にどんなことをしてほしかったのかの 3 つの視点からの報告となった。報告内容を学習会実施前までに確認、当日の資料として作成し、登壇者からはそれをもとに報告してもらうこととした。

また、公運審委員長からは公運審審議内容の途中報告、先の登壇者 7 名の報告を第一部として、休憩後、第二部は、「事例報告お話しから見えてきたこと」と題し、登壇者同士、参加者である市民のフロアからの質疑応答等の発言を交えながら進めることになった。第二部の進行及び簡単なまとめを先の学識委員の一人が担当することとなった。

登壇者との打ち合わせは、コロナ禍もあり、直接会うことが時間的・物理的に難しかったため、学習会メンバーの代表を窓口にメールや電話で打合せを行った。学習会の主旨、当日の流れ、役割等を伝えるとともに、参加者に配布するレジュメへの掲載内容の作成を依頼することとなった。

⑤ 学習会を開催できる喜び～2 か月前～

広報としてのチラシ等の作成、印刷を終え、掲示板への貼付、社会教育を学ぶ学生への周知を実施したいと考えた。また、コロナ感染状況は先が読めないが、会場参加以外に Zoom によるオンライン参加も予定することになり、その準備についても職員との相談となった。オンライン参加を可能とするための公民館の設備の限界はあったものの、オンライン操作を得意とする公運審委員が担当を引き受けてくれることになった。

受付開始が始まった当初、参加希望者は多く集まってはいなかったため、公運審委員にも協力を依頼し呼びかけを行った。結果的に公運審委員を除いても 30 名以上の申し込み希望があり、担当者としてはホッとした思いがした。

コロナ禍での制約がしばらく続いていたが、この時期は、感染状況が比較的落ち着き、人数制限を少し緩めた時期に実施できたことが何よりも幸運だった。参加者数が増えたことで、考えていた会場のレイアウトを急遽変更する等あったが、慌ただしい中にも学習会が実施できる喜びがあった。

当日、1 時間半程前から出席できる公運審委員で準備が始まった。会場は、いつもの公運審の定例会が行われる会場と同じ公民館の地下ホールである。学習会担当者は登壇者との打ち合わせが別室であるため、準備作業の全体を見ることはできなかったが、受付、登壇者や会場の席、資料、音響、そしてオンライン接続や感染対策の準備が進められた。職員と委員で協力しながら準備する様子は、みな生き生きとしているようで嬉しく感じた。

受付が始まり、会場に参加者が集まって来ると、さらに賑やかになり、学習会の開始を待つ人、再会を喜ぶ人たちの姿等、久々に人びとが集う公民館本来の姿を見ることができた。

企画や実施への不安があったものの、社会教育学習会「コロナ禍の学びとつながり～公民館の役割と期待すること～」は、多くの人の協力により、ようやく本番を迎えることができた。

(3) 登壇者の言葉からふり返るそれぞれの思い

学習会に参加した様々な市民の声（思い）を通して、公民館に求められる役割や期待することを以下の 3 点から改めて考えてみたい。この 3 点は、当日の学習会で公運審委員長から提示された論点であるが、先の参加者アンケートの「委員長の設問、問題意識とつなげてまとめられたらもっとよかった」とあるように、時間の都合上、充分に掘り下げることはできなかった。

しかし、今後の社会教育や公民館を考える上で核となる大切な論点が多数提起されたように思う。学習会を通じて、登壇者や参加した市民の声（思い）から公民館の役割や期待に関する言葉を以下で整理しておく。※学習会において出された論点から（当日のレジュメより）

今後検証していきたいこと、議論していきたいこと

① 高齢の方、しょうがいのある方、日本語を母語としない方々など、学びに参加しづらい方々の学び・活動をそれぞれの立場からどのように支えていくことができるのか？
② 公民館は、国立で暮らす市民の誰もが何気なく訪れ、安心して話ができる場でもあるのでは。地域の安心の場としての公民館があることを広く知ってもらいには？
③ 一人ひとりが主体的に学び、生きることを、公民館がどのように支えることができるのか？例えば、休館時、公民館の立場から何ができたか？

① 学びに参加しづらい方々を支える公民館

学習会担当班による企画の際、コロナ禍による緊急事態宣言により公民館が閉館したことや利用制限を受けたことによる利用団体の声（思い）を聞くことをスタートラインにしたい思いがあった。その中で、今回の学習会の登壇者を上記①のような学びに参加しづらい方々に焦点を当て、報告を依頼した。

当日の登壇者、例えば、外国人や日本語を母語としない人の日本語学習のサポートする団体「KUNIFA 日本語サポート」の池田さんからは、「災害時やコロナ禍の情報は、日本に住んでいても外国の方には届きにくく、生活をする中で圧倒的な“情報弱者”である」という報告があった。日頃、私たちは溢れる情報の中で生活しているが、日本語習得が不十分なことにより、生活を送る上で不自由な状況下に置かれている人びとの事例が語られ、言語指導・習得の関係だけではないつながりを通して地域で支えていくことの大切さが伝わった。

しょうがいしゃと共に喫茶の運営をする団体「喫茶わいがや」の片岡さんからは、コロナ禍において、喫茶を営業することの感染リスク、喫茶を営業停止することによるしょうがいしゃや青年たちの居場所の問題を「2つのジレンマ」として悩んだという報告があった。普段、喫茶実習を通じてしょうがいしゃや青年たちの居場所となっている場が閉鎖されることは、生活が一変し、心身への影響も大きいため、どうつながれるのか工夫し、YouTube 配信で行った「コーヒーハウスラジオ」のように、SNS 等を利用した新たな試みについて知ることができた。

また、中・高校生の学習支援を行う団体「LABO☆くにスタ」の山本さんも、コロナ禍で同様に若者の居場所がなくなったこと。だからこそ「公民館は開いていてほしかった」「居場所としての場はやっぱり閉じていてほしくない」と語った。多感な時期である中・高校生の話しを聞く機会がなくなったこと、塾に行かない、行けない学習者の受け皿でもあった学習支援についても、コロナ感染対策による“適正距離”が人との関わりを減らすことにつながってしまったという報告であった。

通常においても、学びに参加しづらい課題をもつ人びとを支えることができるその数は氷山の一角かもしれないが、公民館という場でつながる関係は、弱者を置き去りにしない一歩につながると考える。コロナ感染予防のために出かけづらい、人に会いづらい、関わりづらいという苦しさの状況が各報告から伝わった。

社会教育法第 3 条には「国及び地方公共団体は～略～自ら実際生活に即する文化的教養を高め得るような環境に醸成するように努めなければならない」とある。コロナ禍において公民館ができることは、可能な情報を伝える、対面やオンライン等の工夫で学びや居場所を維持する等、感染対策をしつつ、人が集う、つながることができる可能性を探ることが求められている。

② 地域の安心の場としての公民館

誰もが経験のないコロナ禍。他地区の公民館を始めとする社会教育施設が閉館する中で、国立市公民館も一時期閉館を選択した。突然の閉館になった当時、団体等の利用制限や公民館の主催事業が延期や中止になった。しかし、他地区と比較すると国立市公民館は、比較的短期間で休館期間が終了したことや、開館後の閉館時刻も 22 時までとなっている。国立市には公共施設がトップダウンによって一斉に閉館することへの疑問を持つ市民たちの働きかけがあり、実際、市民団体が公民館の閉館について質問書や要望書等を公民館と国立市に提出している。公民館における市民の学びを守る、支える、そのような土壌、地域性が「国立らしさ」につながるのではないだろうか。

学習会において、高齢者団体からの登壇者、原さんは「孤独は山になく、街にある」という言葉を紹介した。言うまでもなく、コロナ禍で孤独を感じるのは高齢者も若者も同様であるが、実際に孤独、寂しいという言葉を聴くことは、その言葉の重みが伝わってくる。団体からは、コロナ禍で人が集まることができず苦労したこと。雑談でもよいから、少しでも人が集まることができることを願う切実な発言があった。公民館が人と人がつながる場をつくってきたことを再認識するとともに、居場所機能を保証していくことが求められる。

地域の安心の場としての公民館とは、市民にとって物理的・心理的な居場所となり、一人でも複数でも受け入れられ、つながることができる場でもある。そのような公民館の役割や機能を積極的に市民に周知

していくことが新たな学習者や利用者につながる可能性にもなると考える。

③　一人ひとりの主体的な学びを支える公民館

「学びとは何か」・・・社会教育を学ぶ大学院生である公運審委員長の末光さんから学習会後半で登壇者に問いかけがあった。初めに大学の指導教員の考えである「学び」についての紹介があり、それは、平仮名の「まなび」と言う。「自分も変わって社会も変えていくプロセス、自分がいろいろな人と関わりながら、自分も変わっていきながら、その地域も変えていく。全体が変わっていく」という動的なプロセスとして、学びを考えるというものだ。そして、コロナ禍の困難な状況下、一人ひとりが考え方を変えていく、あるいは変えていこうとすること、自分はどう変わっていったのか、変わっていこうとしているのかという内容である（末光さんの発言より編集）。

全体の流れや時間の都合上、登壇者全員がその問いかけに応えることができなかったが、学びにつながる登壇者の発言の一部を紹介したい。

例えば、「公利連」の長田さんは、「人が集まっていろいろ交流できるということが、何をおいても大事」と発言した。「心遊会」の原さんは、「高齢になってから親友ができたこと」、「仲間がいる。仲間と一緒に行く。（中略）お互いにお互いをこうやって面倒見ながら活動していく。そうすると、元気になる。月に一遍でも動ければ本当に元気になる。人と会うことが大事だ」と長田さん同様に「対面で会うこと」の大切さが語られた。

「喫茶わいがや」の片岡さんからの報告では、活動の記録をデジタル化して残すことで、次に活動をする人たちにわかるようにしていく。これは、デジタルで記録を残すという新たな挑戦には仲間との話し合いや工夫があり、そのプロセスが学びにつながると思う。スタッフとして「喫茶わいがや」にもかかわる「ライフデザイン 2018」の久野さんは、コロナ禍で加速的に進んだオンラインやデジタルのスキルについて、比較的得意とする若者から学ぶことがあると語った。世代を超えて互いに学び合うというものだ。

「LABO☆くにスタ」の山本さんは、「未知のウイルスであるコロナについては“知らないから不安”という考え方があると発言した。想定されることは知識を持つことが大切であり、新たな知識を獲得してために努力することの大切さが発言から伝わった。

また、「この学習会そのものが学びの場となっている」と発言したのは、「KUNIFA 日本語サポート」の池田さんである。「一生懸命、私の頭の中で、ものすごく「学び」が進んでいる。人と意見を交換しながら、自分の考えが変わっていく、書かれたもの等も読んだり、情報を得たりして、で、自分も変わっていく、そのようなことが「学び」ではないか」という力強い発言であった。同様に「公利連」の長田さんは、「活動の中で、利用者が公民館を無料で、公平に、差別なく気持ちよく使えるようにするためには「学び」があり、人と出会って、自分にはないものを感じたり、あるいは自分では気がつかなかったこと、考えを聞かせてもらったりということは、自分の考えや感じ方の幅が広くなる。それが自分の中で育っていくと思う」と発言した。

会場からの発言には、公民館事業の歴史や人のつながりを感じる内容もあった。かつて、子育て期に参加した公民館事業「主婦が働くとき」で出会った参加者同士が時を経て、「心遊会」で再会したという登壇者の発言に、参加者がエールを送りたいという趣旨だった。活動を通じて得た人とのつながりとその意味を語る人生の先輩からのエールは思いがけない展開となり、参加者が登壇者とやり取りするその様子から、響き合う、温かな関係が伝わってきた。

公民館での人と人のつながりが、学びを生み、さらにつながりを強くする。生きていくとは学ぶことであり、学びの連続でもある。職員の針山さんの学習会の中での発言、「学びとつながりは地続き」が登壇者の報告や企画者の思いとも重なり、一人ひとりの主体的な学びを支える公民館の底力を改めて実感した。

(4) まとめにかえて

今回の社会教育学習会の開催は、偶然にも、コロナ感染者状況が比較的落ち着いていた時期に実施することができた。感染者状況によっては参加者の人数制限を実施せざるを得ない、また、関係者が感染したり、濃厚接触者となったりする可能性があるなかで、当日の開催がどうなるのかが読めなかったことが担当者としては気がかりであった。しかし、実際は、予定していた７名の登壇者や学習会参加者としての市民、準備に協力してくださった職員や公運審委員と多くの人びとが当日に関わることができ、担当者にとって何よりも幸せであった。講座等の参加者数の多少で一喜一憂するものではないが、コロナ禍でも開催できたこと、公民館という同じ空間で多くの人びとと考え、学び、時間を共有できたことが、かけがえのない宝物として心に残ったからだ。それこそが社会教育の魅力だと思う。

社会教育学習会をふり返ると、報告・発言の内容から公民館における「コロナ禍の学びとつながり」について多くのことを学ぶことができたと思う。公民館を利用する団体や所属する人びとの思いを「生の声」として聴くことができたことは大きな収穫であり、今も記憶に残る社会教育学習会だった。

「なぜ、私たちは学ぶのか」。人は一人では生きられない現実を前にした時、自らの利害だけではなく、他者や地域等との関係を築き、よりよく生きるために学ぶのではないかと思う。それは、民主主義の精神を身に着けることでもあり、権利としての学びでもあり、「大人の学び」につながる概念だと考える。学びを通じて新しい自分との出会いや、他者と出会うことができるのが社会教育の醍醐味であり、社会教育施設である公民館には、共に生きるための学びやつながりをつくる・支える専門職員が欠かせないと確信する。

そして、「何のために、誰のために学ぶのか」。最後にユネスコの「学習権宣言」をここでも一部引用したい。予期せぬことが起きたコロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻等、混迷する時代においては、生存権も学習権も私たちにとって同等に重要な権利であることを踏まえ、「学習権宣言」の理念とともに、過去、現在、未来を意識した“学び”と“つながり”を大切にしていかなければならない。公民館の役割はますます重要になる。

※ユネスコ「学習権宣言」
（略）学習権は、人間の生存にとって不可欠な手段である。

もし、世界の人びとが食糧の生産やその他の基本的な人間の欲求が満たされることを望むならば、世界の人びとは学習権をもたなければならない。

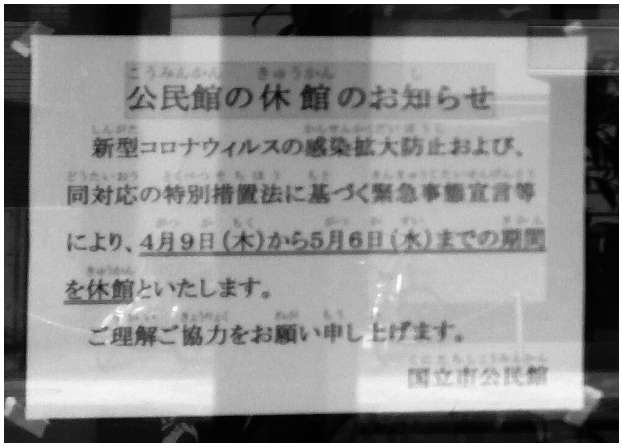
もし、女性も男性も、より健康的な生活を営もうとするなら、彼らは学習権をもたなければならない。

もし、わたしたちが戦争を避けようとするなら、平和に生きることを学び、お互いに理解し合うことを学ばなければならない。(略)

実施後、今期答申に社会教育学習会の内容をどう活かすことができるのか、担当委員の間で幾度も話し合いを持った。学習会の余韻もあり、当日の様子をできるだけリアルに伝えようという思いが共通にあったと思う。当日は限られた時間ではあったが、社会教育学習会の様子から伝わるコロナ禍の「生の声」を届けることができたのなら望外の幸せである。

社会教育学習会担当委員
（公民館運営審議会委員）
幸島裕子（文責）
高野　宏
野口泰寛

公民館入口に貼られた休館のお知らせ
（2020 年 4 月）



第 33 期国立市公民館運営審議会答申

新型コロナウイルス感染拡大時における　教育機関としての公民館事業について

発行日　2022 年 10 月 11 日
執筆・編集　第 33 期国立市公民館運営審議会
発　行　国立市公民館
〒 186-0004 東京都国立市中 1-15-1
tel:042-572-5141